

平成28年度 研究成果報告書

アクティブ・ラーニングによる授業の質的転換に関する調査研究



「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり

アクティブ・ラーニング ノ ススメ in かがわ



平成29年2月

香川県教育センター

はじめに

平成 26 年 11 月 20 日、文部科学大臣が中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問した中に、このような内容があります。

「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。

「アクティブ・ラーニング」というキーワードは、4 ページにわたる文書の中で、この部分も含めて 4 回使われ、瞬く間に注目を集めるようになりました。

香川県教育センターでは、県としての教育課題を自尊意識や学習意欲においていることもあり、すぐに「アクティブ・ラーニング」（以下、AL）について研究にとりかかりました。当初は、情報源も情報量も限られていたため、調査研究としてふさわしいものかどうか迷いながらのスタートだったことを思い出します。

これまでの調査研究の成果の普及は年度末に報告書にまとめて発表する方法でしたが、今回は、新出のキーワードに現場での混乱が起こらないよう、新しい情報をいち早く簡潔に現場に伝えるために、平成 27 年 6 月をスタートに 2 年間で 6 回、リーフレットを継続的に発行することにしました。さらに、「アクティブ・ラーニングリーダー養成研修」を開催したり、教育センターにおける各種研修をアクティブ・ラーニング型研修として、受講者に AL のよさを体験してもらったりすることで、少しずつ AL の理解を広げてきました。

また、本調査研究は理論研究だけでなく、協力学校（54 ページ）を依頼し、学校の実践をもとに研究を進めることができたことが大きな成果につながりました。協力学校を訪問した時、能動的な子どもたちの姿に出会い、教室の空気を感じ取り、AL の可能性を実感しつつ研究を進めていくことができたのです。それに加えて印象深かったのは、教職員の協働です。AL の視点で子どもたちの学びをとらえて議論することは、子どもたちの学習者としての資質・能力を育てていくことにつながり、各教職員で担当する教科、領域、分掌等の壁を超えて、共通の方向性をもつことになっていました。研究協議そのものが能動的で、課題を指摘する場面でも建設的に進んでいました。まさにカリキュラム・マネジメントが機能している場面を目の当たりにしたのです。

これらの協力学校の実践をもとにまとめている本調査研究は、平成 28・29 年度全国教育研究所連盟課題研究の指定を受けており、平成 29 年度は研究成果を全国に発信することとしています。

最後になりましたが、AL によって「教師が何を教えるか」から「子どもがどのような力を身に付けたか」への質的転換を図ることで、これからの子どもたちに必要な資質・能力が育成され、子どもが学びにときめき、教師がかがやく授業が広がることを願っております。

平成 29 年 2 月

香川県教育センター
所長 藤井 浩史

目次

はじめに	1
目次	2
研究の概要	3
第1章 これからの教育で求められる授業って、どんな授業？	5
1 なぜ、授業改善が求められているの？	6
1) 児童生徒の現状と課題	6
2) これからの時代に育みたい資質・能力	7
2 どのように授業改善をすればいいの？	8
1) 深い学びを実現する授業への質的転換	8
2) 授業づくりでの様々な誤解や不安	12
第2章 教師に求められる授業づくりや集団づくりとは？	13
1 学習指導の視点	14
1) 課題を明確にした授業展開の計画	14
2) 授業のあるべき姿を児童生徒と共有	14
3) 児童生徒の発言の受容	16
4) 問題解決場面の設定	16
5) 学びの過程やその成果の振り返り	17
2 学級経営の視点 ～学びに向かう集団づくり～	18
1) 学級集団づくり	18
2) 学習指導と生徒指導	19
3) 児童生徒への共感的理解	19
4) 保護者との関係づくり	20
第3章 学習場面での児童生徒の姿は？ そのために教師はどうするの？	21
1 学習場面における児童生徒の姿と教師の手立て	22
1) 見通しをもつ場面	22
2) 探究する場面	25
3) 振り返りの場面	32
2 児童生徒の姿と教師の手立て〈一覧〉	36
1) 授業における児童生徒の姿	36
2) 授業における教師の手立て	37
3) 三つの視点を「問題の発見・解決のプロセス」に位置付けた実践事例	38
第4章 授業改善は誰がするの？	39
1 全員参加の学校づくり・授業づくり	40
1) アクティブ・ラーニングと連動させたカリキュラム・マネジメント	40
2) 児童生徒と教師が共に学校を創る	44
3) 授業改善を全教職員で進めていくために	45
2 授業改善のためのチェックポイント	46
資料 「アクティブ・ラーニング ノ ススメ in かがわ」 Leaf. 1～6	47

研究の概要

1 本調査研究について

(1) 背景

我が国では2030年の社会、そして更にその先の豊かな未来において子どもたちがよりよい人生とよりよい社会を築いていくために学校教育の在り方が見直されています。

学習指導要領改訂の背景

人工知能が進化して、人間が活躍できる職業はなくなるのではないか。

今学校で教えていることは、時代が変化したら通用しなくなるのではないか。

子供たちに、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育を実現する。

時代の変化や社会の情勢、児童生徒の現状

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

【学習指導要領改訂の経緯】

中央教育審議会
 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）
 （平成26年11月20日）

教育課程企画特別部会
 教育課程企画特別部会における論点整理（平成27年8月26日）

教育課程部会
 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）
 （平成28年8月26日）

中央教育審議会
 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年12月21日）



これからの教育課程の理念

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかが明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく。

＜社会に開かれた教育課程＞

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い、関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

【学習指導要領改訂の予定】

告示を行った後、幼稚園は周知徹底を経て、平成30年度から全面実施予定。小・中・高等学校は、周知、教科書の検定・採択等を経て、小学校は32年度から、中学校は33年度から全面実施、高等学校は34年度から年次進行で実施予定。

(2) 目的

香川県では、これまでも児童生徒の自尊意識、学習意欲、言語活動に課題が見られ、授業改善等が取り組まれてきました。

そこで、香川県教育センターでは平成27・28年度、「アクティブ・ラーニングによる授業の質的転換」をテーマに調査研究を進め、アクティブ・ラーニングによる授業方法の工夫改善を一層推進することで、児童生徒の自尊意識や学習意欲を高め、言語活動を充実させるとともに、教員の指導力向上を図りたいと考えました。

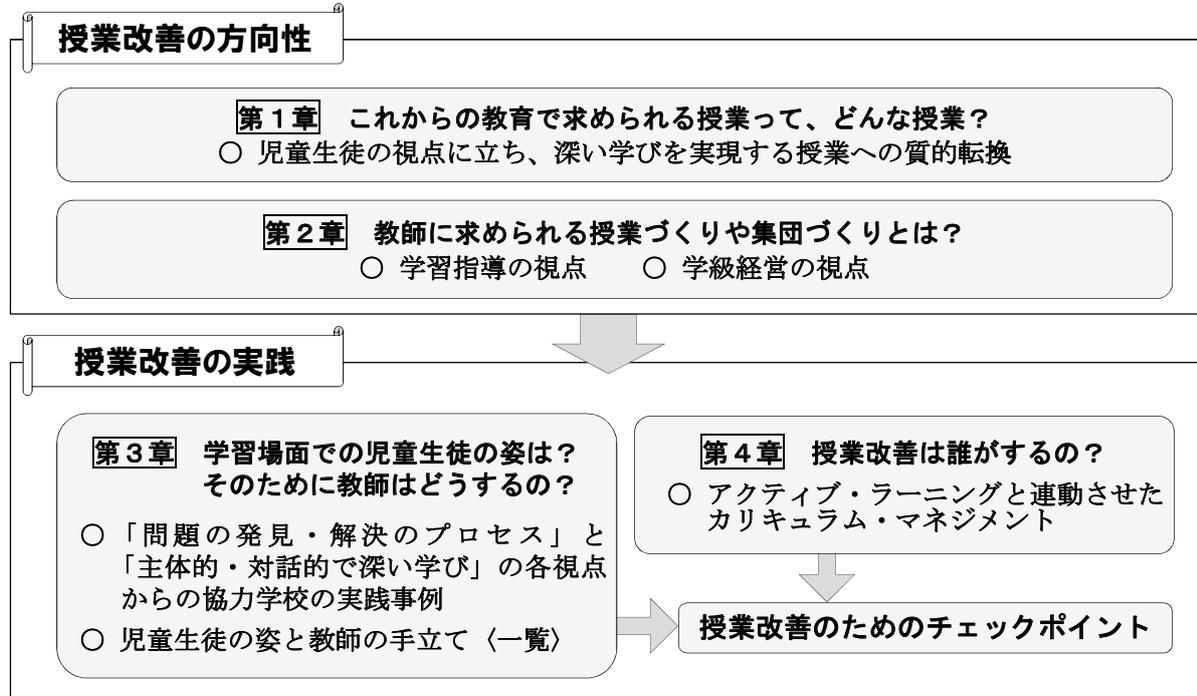
(3) 方法

香川県教育センター協力学校の先導的な授業研究について調査を行いました。

また、当センターで実施する教員研修において、アクティブ・ラーニングに関する講義・演習を行う専門研修や、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた研修を実施しました。

2 本報告書について

文部科学省から出される資料等を踏まえ、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の方向性及び具体的な授業改善の実践について提案しています。



〈報告書内の表示の見方〉

- 当センターで作成したリーフレット「アクティブ・ラーニング ノ ススメ in かがわ」Leaf. 1～6です。(P.47 参照)



- 当センターで作成した図や表等には、「香川県教育センター」のロゴを付けています。



第1章

これからの教育で求められる授業って、
どんな授業？



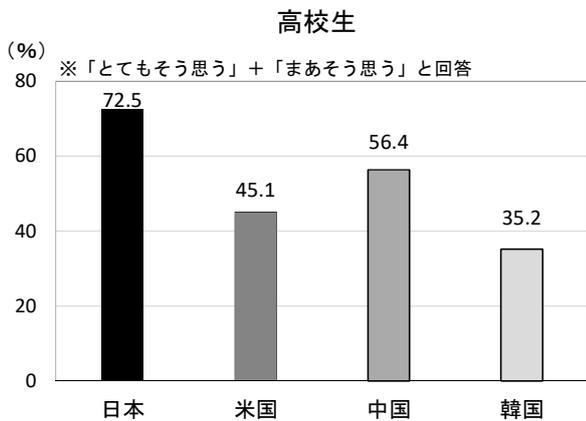
児童生徒の視点に立ち、
深い学びを実現する授業への質的転換！

1 なぜ、授業改善が求められているの？

今の子どもたちが生きるこれからの社会は、急激な社会変化を迎えようとしています。その中で、たくましくしなやかに生き抜くための資質・能力が求められていますが、現実の子どもたちは様々な課題を抱えていることが、国内外の調査から分かります。まずは、児童生徒の現状と課題、育みたい資質・能力を考えてみましょう。

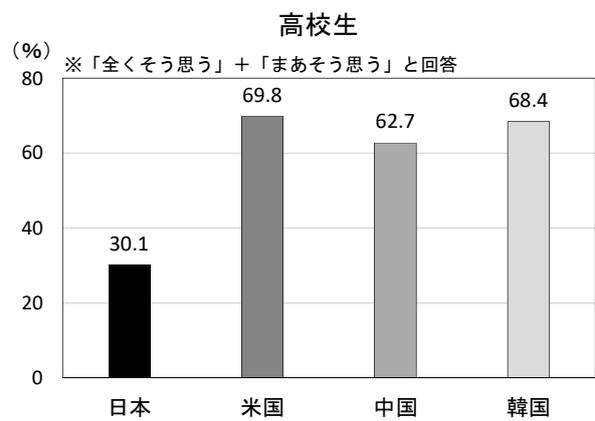
1) 児童生徒の現状と課題

自分はダメな人間だと思うことがある



(財) 国立青少年教育振興機構「高校生の生活と意識に関する調査報告書」(平成27年8月)より香川県教育センターが作成

私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない

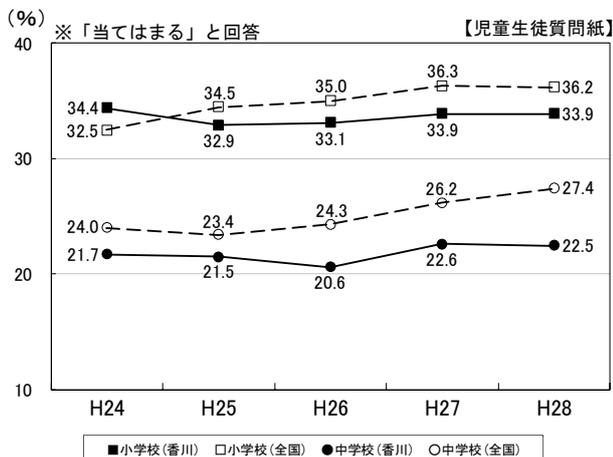


(財) 一ツ橋文芸教育振興協会、(財) 日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識 -日本・アメリカ・中国・韓国の比較-」(平成21年2月)より香川県教育センターが作成

国内外の学力調査では、

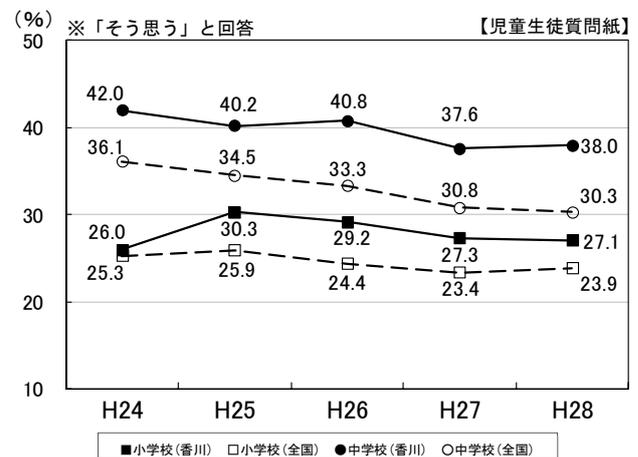
- 判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べること
 - 自己肯定感や学習意欲、学ぶことの楽しさや意義
 - 自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識、社会参画への意識
- 等の課題が指摘されており、子どもたちの資質・能力を育むことが求められています。また、全国学力・学習状況調査の結果をみると、香川県においても、「自尊意識等」「学習意欲」「言語活動」に課題が伺えます。

自分にはよいところがある



香川県教育センター「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書」(平成28年10月)

説明したり、文章を書いたりするのは難しい



香川県教育センター「全国学力・学習状況調査報告書」(平成24~28年度)より作成

2) これからの時代に育みたい資質・能力

これからの社会は、知識基盤社会であると同時に、情報化やグローバル化等の変化が加速度的になり、将来の予測がますます難しい時代になるだろうといわれています。

そこで、中央教育審議会では、教育基本法が目指す教育の目的や学校教育法第30条第2項の「学力の3要素」に基づき、子どもたちの現状や課題を踏まえつつ、この先の社会の在り方を見据えながら学校教育を通じて子どもたちに育てたい姿について示しています。そして、「何を知っているか」とどまらず、「何ができるようになるか」という観点から、育成を目指す資質・能力を「三つの柱」から設定しています。

【学校教育を通じて子供たちに育てたい姿】

- ・社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。
- ・対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること。
- ・変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること。



中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

また、香川県では、「夢に向かってチャレンジする人づくり」を教育の基本理念とし、「一人ひとりの子どもが、夢や目標を持ち、みずからの力でこれにチャレンジするための基礎を培うため、学校、家庭、地域が連携しながら、確かな学力、豊かな心、すこやかな体の調和のとれた育成」を目指しています。そこで、子どもたちに身に付けてもらいたい「資質能力」を以下のように挙げています。

香川県教育基本計画（平成28～32年度）に示されている「資質能力」	
豊かな知性	今世紀は「知識基盤社会」の時代と言われ、知識のグローバル化や絶え間ない技術革新等に対応するため、生涯にわたって学び続けることが求められています。 学校では、読み、書き、計算する力など、社会生活を営むために必要な基礎的な知識や技能に加え、幅広い教養を身につけることが必要です。さらに、このような力を基盤として、主体的に学び、みずから課題を発見する能力を高めることが重要です。 また、発見した課題を解決するためには、柔軟な発想で新しいものを創り出す能力、探求心や向上心などの学ぶ意欲とともに、コミュニケーション能力、つまり、集団において、自分の考えをきちんと伝えることができる表現力や論理性、相手と対話し相互に考えを深め合う力、人間関係やチームワークを形成する力などを育てることが大切です。
たくましく、すこやかな心と体	人間の基本的な資質として、誠実さや責任感、感謝する心や他者に共感し思いやる心、倫理観や正義感、人権感覚などを身につける必要があります。 さらに、忍耐力などの強靱な精神、美しいものに感動する豊かな感性や人間に対する深い愛情、自然、生命に対する畏敬の念など、豊かな人間性を養うことも重要です。 また、充実した人生を送ることができるよう、望ましい生活習慣や必要な体力・運動能力を身につけ、健康を維持し増進させるための知識やスポーツに親しむ意欲を持つことも必要です。
自主・自立の精神	成熟した社会において、個人は一人の人間として尊重されるとともに、自由と責任の自覚のもと自立して生きていくことが求められています。 個々の人格や価値観を尊重し、互いを理解する心を養うとともに、みずからを律し主体的に判断し行動することができる自己管理能力、自分の価値や可能性を信頼する自己肯定感、自己実現をめざそうとする意欲や自発性、大きな夢や高い理想の実現をめざすチャレンジ精神を身につけることが重要です。
社会の一員としての自覚と態度	人は、一人で独立して存在できるものではなく、地域や国といった共同体の中で互いに支えあい、協力しながら生きるものです。みずからが社会の形成者であるという自覚と認識をはぐくみ、社会規範を尊重し、世の中をよくしていこうとする意識や態度を養うことが重要です。 また、グローバル化した社会で活躍するためには、香川や我が国のことをよく知り、これを愛し、誇りに思う心を養うとともに、異なる文化や価値観を理解し受け入れる態度を身につけることも必要です。

2 どのように授業改善をすればいいの？

「先生、今日の授業、よく分かったよ」「今日の課題をもう少し考えたいな」
 児童生徒は、授業でどのような姿を見せてくれますか？ 私たち教師は、児童生徒に付けたい力が育まれるように授業づくりをしています。これからの教育で求められる資質・能力を育成するために、今後どのような視点に立った授業改善をすればよいか考えていきましょう。

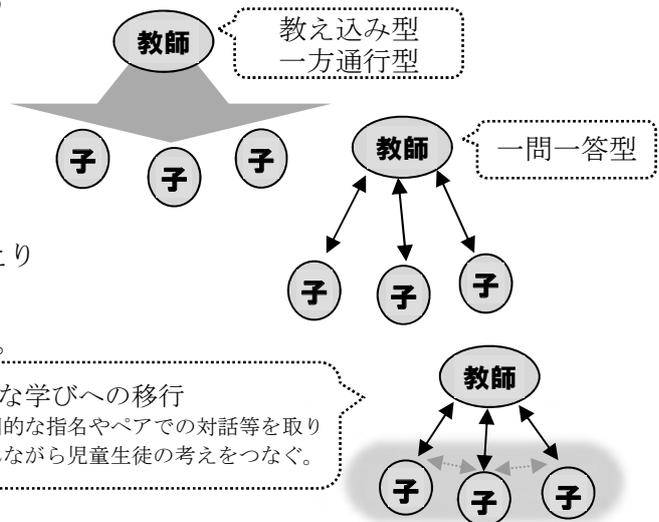
1) 深い学びを実現する授業への質的転換

① 授業に対する教師の意識を変える

これまでの授業の課題

○受動的な学び

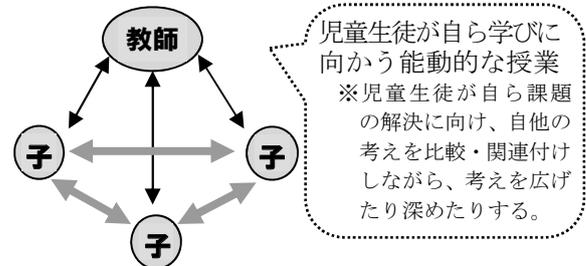
- ・ 教師主導の教え込む一方通行型の授業。
- ・ 一斉指導のみ。一問一答型のみ。
- ・ 教師の説明ばかりで、児童生徒が思考したり表現したりする時間がない。
- ・ 児童生徒は板書をノート等へ書き写すのみ。
- ・ 活動はあるが、学びがない。



これからの授業

○能動的な学び

- ・ 児童生徒が自ら学びに向かう授業。
- ・ 資質・能力の育成を目指した授業。
- ・ 自力解決と他者との双方向の学び合いにより、思考したり表現したりする時間が確保されている授業。
- ・ 実社会や実生活との関連がある授業。
- ・ 自己の学びを振り返り、次の学びにつなげる等、学ぶ価値を実感することができる授業。



Q&A



児童生徒が自ら学びに向かう能動的な授業づくりとは？

育みたい力を明確にした上で、児童生徒の内面を理解し、その視点に立ちながら授業づくりをすることです。



実際の授業では、児童生徒に自分の考えを表現させ、多様な考えを共有・吟味していけるようにコーディネートしていきます。

教師は教えるはいけないの？



「教える場面」は必要です。ただし、教師が「教える場面」と児童生徒が「思考・判断・表現する場面」を効果的に設計し関連させながら指導することが大切です。教師は、ねらいの達成に向けて、各場面における児童生徒の姿を見取り、適切な指導をしていきましょう。



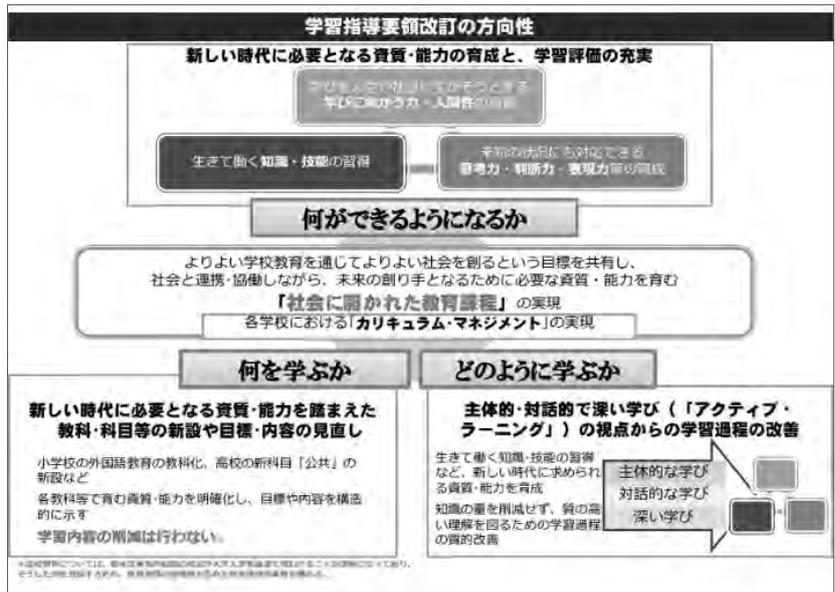
② 「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視する

学習指導要領改訂の方向性では、新しい時代に必要となる資質・能力を育むために、「何を学ぶか」という目標や内容の見直しを図り、その内容を「どのように学ぶか」という学習過程の改善を目指しています。

つまり、単に知識を記憶する学びにとどまらず、身に付けた資質・能力が様々な課題の解決に生かせることを実感できるような、学びの深まりが重要になります。

そこで、児童生徒の発達の段階を踏まえつつ、教師自身が学習過程の全体を見渡し、児童生徒の学びへの積極的な関与と深い理解を促すよう、自らの指導方法を不断に見直し、改善していくことが求められています。

そのための授業改善の視点として、「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点）が挙げられます。



中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

主体的な学び	学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
対話的な学び	子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
深い学び	習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）



〈アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくり〉

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）をもとに香川県教育センターが作成

③ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学びのプロセス

「教育の強靱化に向けて（文部科学大臣メッセージ）」（平成28年5月10日）において、アクティブ・ラーニングの視点は、「知識が生きて働くものとして習得され、必要な力が身に付くことを目指す」ものと述べています。

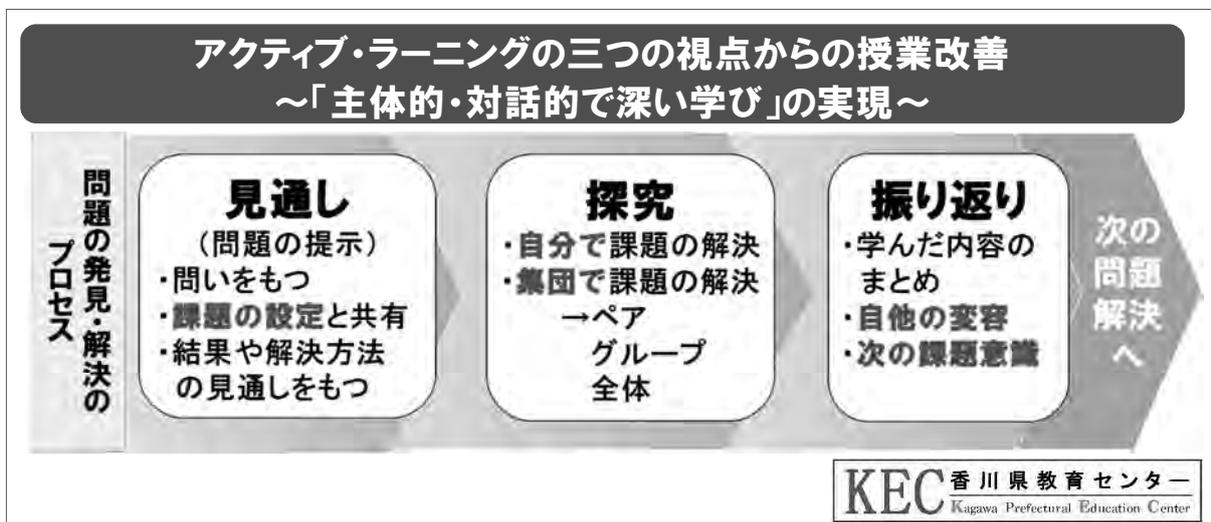
子供たちが学ぶ過程の中で、新しい知識が、既に持っている知識や経験と結び付けられることにより、各教科等における学習内容の本質的な理解に関わる主要な概念として習得され、そうした概念がさらに、社会生活において活用されるものとなることが重要である。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

文部科学大臣メッセージでは、さらに、質の高い理解を図るための学習過程の質的な改善を行う必要性について述べ、そのために「主体的な学び」「対話的な学び」の過程を実現し、特に「深い学び」につなげる学びの過程を充実させることが大切であるとしています。

児童生徒の深い理解を促すためには、学習内容に迫る動機付けを行うことが必要です。さらに、仲間と共に試行錯誤しながら問題の解決に向けた学習活動を行い、その上で学習内容のまとめとともに、自らの学習活動を振り返って学びの有用性を実感し、次の学びにつなげるという学習のプロセスが重要になります。

そこで、香川県教育センターでは、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）をもとに、「問題の発見・解決のプロセス」を以下のように設定しました。このプロセスは、一単位時間の授業だけでなく、単元や題材のまとめとしても考えていくことが大切です。また、必ずしも一方通行の流れではないことにも留意します。



〈「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた問題の発見・解決のプロセス〉

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）をもとに香川県教育センターが作成

※ただし、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点は、児童生徒の学びの過程としては一体として実現されるものであり、それぞれ相互に影響し合うものですが、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意することが必要です。

香川県教育センターでは、この三つの視点と、問題の発見・解決のプロセスを関連付け、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善における「児童生徒の姿」とその姿を促す「教師の手立て」について分析しました。このことは、第3章で具体的に説明しています。

④ 授業の質的転換を目指す

「授業の質的転換」とは、学習内容と方法の両方を重視し、児童生徒の学びの過程を質的に高めることで、児童生徒が自ら学びに向かい、「深い学び」を実現することです。

アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善では、「話し合いをしているからアクティブである」「何か決まった学習方法があればよい」といった形式的に対話を取り入れた授業や特定の型の指導と捉えられることがあります。また、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）において、「主体的な学び」「対話的な学び」については改善が図りやすいが、「深い学び」については理解しにくいことから、深まりを欠き表面的な活動に陥りやすいとの指摘もあります。

そこで、学びの「深まり」の鍵となるものとして、「見方・考え方」（様々な事象等を捉える各教科等ならではの視点や思考の枠組み）が挙げられています。

見方・考え方 新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものである。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

深い学び 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

「見方・考え方」は各教科等の特質があり、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものです。そして、児童生徒がこの「見方・考え方」を働かせ成長させながら、資質・能力を育むことができるように学びの過程を質的に高めていくことが「深い学び」につながり、授業の質的転換に向かうものと考えられます。

したがって、「何ができるようになるか」を明確にししながら、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学びの過程の両方を重視し、児童生徒の実際の状況を踏まえた多様な学習活動を組み合わせていかなければならないでしょう。

Q&A



「深い学び」として、具体的にどんな場面が考えられますか？



「問題の発見・解決のプロセス」において、対話を通して多様な考えを吟味し、それらを統合して問題の解決を図る場面が考えられます。例えば、右の事例のように、問題を解決するために、他者の考えを受容し、その考えに対して「問い返し」ながらポイントを見いだす等、解決の方法を試行錯誤する場面があるでしょう。



4-2

ICTの活用を通して対話を重ねる 連続技に挑戦！～前方支持回転のポイントを見つけよう～ （小学校 第5学年 体育科）

うまく回転できなくて、鉄棒から落ちてしまう。

腕が曲がっているから、腰が鉄棒から離れてしまうかもしれないよ。

だから、背中も丸くなって回転スピードが遅くなっているんだな。

それじゃあ、腰が離れないように、足の付け根で鉄棒を挟むようにしたらどうだろうか。

なるほど。ロープを使って鉄棒から腰が離れないように練習をしてみよう。

2) 授業づくりでの様々な誤解や不安

実際に授業づくりをする上で、次のような様々な誤解や不安がありませんか。



この前参加した研修会で指導方法を教えてもらったから、それをそのまま実践しよう！

まずは、各学校（各学級）の児童生徒の発達の段階を見つめ、それぞれの状況を的確に把握しましょう。そして、身に付けさせたい力を明確にし、学習場面に応じた適切な指導を検討することが重要です。つまり、各学校（各学級）でアクティブ・ラーニングの視点から授業改善を図ることが大切なポイントです。また、アクティブ・ラーニングという手段が目的化したり、特定の型どおりの指導で形骸化したりしないようにするといいですね。



いつもグループで話し合いをさせているから大丈夫。子どもたちも楽しそうよ！

児童生徒に単に話し合う時間だけを与えては、その時間の目標は達成できず、身に付けさせたい力を育むことにはなりません。何のために（目的）、何について（対象）、どのように（方法）話し合うかを明確にすることで、児童生徒は「友達と話し合っただけで○○が分かった」「○○が解決できた」と学ぶ価値の実感や楽しさにつながります。



知識・技能を身に付けてからでないと、思考したり表現したりはできないよ。

「思考力・判断力・表現力等」は、教師が「教え、練習・反復する」授業だけでは身に付けることはできません。知識・技能と思考は密接につながっており、考えることや課題解決を繰り返すことによって、知識がつながり概念化したり、高度な知識を獲得・習熟したりしていきます。したがって、思考したり表現したりする体験を通して、知識・技能が身に付いたり、高まったりしていくという捉え方も大切です。



アクティブ・ラーニングの授業をすると、話し合い活動を取り入れなければならない。話し合い活動は、時間がかかるからできないわ。

「アクティブ」とは、単に活動的になるのではなく、「能動的」に学ぶということです。したがって、児童生徒が課題の発見・解決に向けて、仲間と考えたり判断したりしていくために、教師の話を「能動的」に聞く場面も考えられるでしょう。

また、ペアやグループ学習、全体交流は、それぞれの特性があり、期待される効果も違います。学習目標や内容、学習場面に照らし合わせて、適切な学習集団や学習方法を設定することで、児童生徒の学びが広がり深まります。単元や題材のまとまりの中で、話し合い活動を効果的に取り入れ、学習意欲を高めたり、自己の考えをもたせたりしましょう。

第2章

教師に求められる授業づくりや 集団づくりとは？



授業づくりの5つのポイント！

学びに向かう集団づくり！

1 学習指導の視点

教師には、児童生徒に必要な知識・技能を身に付けさせるとともに、発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど、児童生徒が能動的に学習に参加できるように指導方法等を工夫した授業づくりが求められています。その実現のため教師は、右の「授業づくりの5つのポイント」に留意しましょう。

授業づくりの5つのポイント

- 1 課題を明確にした授業展開の計画
- 2 授業のあるべき姿を児童生徒と共有
- 3 児童生徒の発言の受容
- 4 問題解決場面の設定
- 5 学びの過程やその成果の振り返り

1) 課題を明確にした授業展開の計画

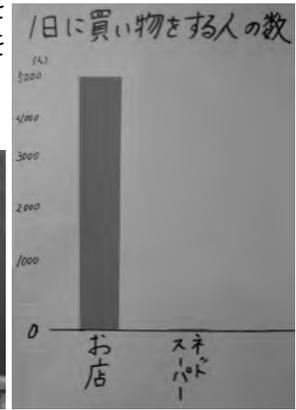
主体的・協働的な学びの視点から、児童生徒が取り組むべき課題を明確にした授業展開を計画するとともに、「どのように学ぶか」という学びの質を重視することが大切です。

課題の設定にあたっては、児童生徒が見通しをもって学習に取り組み、その学びが「深い学び」につながるものになるようにしましょう。

「深い学び」につながる課題の設定例

- ・見通し（結果や解決方法）をもてる課題
- ・困難性のある課題
- ・知的好奇心の高まる課題
- ・実社会や実生活で活用できる課題
- ・認識が揺さぶられる課題 など

事例) 高松市立十河小学校
(3年: 社会「店ではたらく人の仕事と、多様化する地域の人々の消費生活」)
○グラフを提示し、「ネットスーパーを利用する人がこんなに少ないのに、なぜお店はネットスーパーの取組をしているのだろうか」という疑問を生じさせることによって、課題を設定し、それぞれのよさを確かめる必要感をもたせた。



2) 授業のあるべき姿を児童生徒と共有

① 授業におけるルールの共有

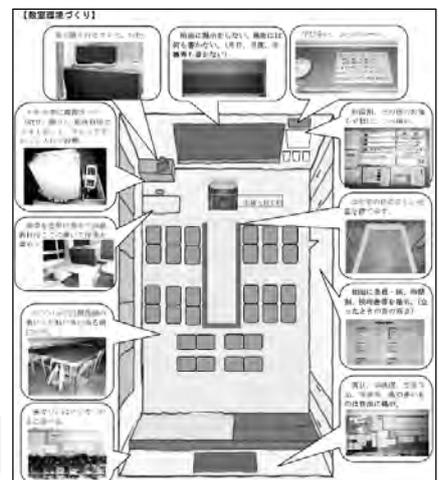
教師は、児童生徒が聴き合ったり、教え合ったりできる時間を保障するとともに、授業におけるルール（授業のあるべき姿）を、児童生徒と共有することで、児童生徒は授業に参加することへの安心感をもつことができます。

授業におけるルールには、「聴くことは大切である」「問いかけには進んで応じる」などがあります。

事例) 高松市立協和中学校

- 「教室環境づくり」を作成し、全教職員が一致して全教室の環境を整えている。
- 全教室を「コの字型」にし、教師が生徒の中に入り、教師主導型から対話型授業への転換を図っている。

全教職員で共有化
⇒全教室共通の取組



この授業におけるルールは、年度当初に、児童生徒の実態や発達の段階を踏まえて共有しておきましょう。年度当初に共有したルールは、必要に応じて修正をすることが考えられますが、無計画に追加したり、内容を変えたりすると、児童生徒が混乱するおそれがあります。修正が必要になった場合は、改めて児童生徒と共有していきます。共有したルールは、「守っていない」ことではなく、「守った」ことに視点をあてて確認し、評価することで定着を図ることができます。

② 「ルール」と「リレーション」の確立が、「主体的・対話的で深い学び」を実現

児童生徒一人ひとりが居心地のよさを感じながら、授業に参加するためには、学習集団内での「ルール」と「リレーション」が同時に確立していることが必要です。

ルール

ペアや少人数のグループ活動を効果的に行うためには、次のような「ルール」を共有しておきましょう。

① 時間を意図的に使い分ける

一人でじっくり熟考する時間、ペアや少人数のグループで学び合う時間、教師の話を聞く時間などを意図的に使い分けましょう。

② 間違いを生かした授業を展開する

安心して発言できるように、間違いを発表することが許されることを共有し、教師は、児童生徒の間違いを授業展開に生かしましょう。

③ 解決に必要な話の価値を積極的に評価する

授業中、特にペアや少人数のグループ活動では、児童生徒が話す言葉に耳を傾け、観察しましょう。話合いに加われない児童生徒がいる、一部の児童生徒の発言だけで話合いが進む等が予想される場合は、どのように対応するかを事前に検討しておきます。

リレーション

「リレーション」とは、信頼関係のある人間関係のことをいいます。

アクティブ・ラーニングの視点に立った授業の成立には、「リレーション」の確立が不可欠です。児童生徒間での「リレーション」がないとどうなるでしょうか。対人関係が形成されず、学習集団として成立しないため、アクティブ・ラーニングの視点からの授業だけでなく、講義形式の授業も困難でしょう。

児童生徒は自分たちで課題を解決していこうとする学習活動を通して、多様な考えに出会い、その違いやよさに気付きながら信頼関係を形成していきます。その積み重ねは、誰に対しても良好な関係で対話できる「リレーション」を一層育てていくことにつながります。

事例) 香川県立高松北高等学校

(1年: 数学・数学Ⅰ「図形と計量」)

○授業における「ルール」と「リレーション」が確立した学級において、生徒が自ら座席配置を工夫していた。

○課題の解決に向けて、生徒は教師や仲間と対話する場面、教師の説明を聞く場面の態度を自ら切り換えていた。



〈教師の説明を聞く場面〉



〈仲間と対話する場面〉

教師の指示が
無くても…

3) 児童生徒の発言の受容

児童生徒の多様な発言に価値を見だし認めること、間違っても大丈夫という安心感をもたせる助言を行い、発言を積極的に授業の展開に生かすことが大切です。

アクティブ・ラーニングの視点に立った授業においては、児童生徒がペアや少人数のグループになって、付箋やホワイトボードなどを使って意見交換をしたり、児童生徒が立場を決めて議論したり、教師に代わって説明したりすることがあります。このような中で見られる児童生徒相互のつぶやきや発言などは、学習を豊かなものにしていきます。

事例) 香川県立丸亀高等学校(1年:情報・社会と情報「問題を解決するには」)

- 他の班で聞いてきた内容を共有しながら、アイデアを増やした。
- 授業後には、最も多くのアイデアを出した班に生徒が集まり、意見交換が自然に行われた。



〈授業中〉



〈授業後〉

4) 問題解決場面の設定

① 他者の意見の傾聴や客観的な判断を通して思考を広げ、深める

他者の意見を傾聴したり、客観的に判断したりすることを通して、自身の意見を修正したり、新しい意見を導き出したりすることを体験します。そのことにより、自己有用感をもたせることが期待できます。

全国学力・学習状況調査の結果をみると、香川県においては、授業では、「話し合う活動をよく行っていたと思いますか」の質問に対して、約80%の児童生徒が、肯定的に回答しています。また、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」の質問に対して、肯定的に回答している児童生徒の割合は、小・中学校ともに昨年度より増加し、全国平均を上回っています。

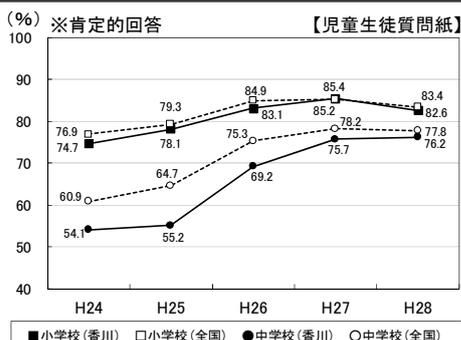
事例) 観音寺市立観音寺中学校(3年:道徳)

主題: きまりを守る 4-(1) 法やきまりの遵守
 思いやりの心をもって 2-(2) 人間愛、思いやり
 資料: 「二通の手紙」
 (出典: 学研「かけがえのない きみだから」)

- 「あなたなら、入園させますか、させませんか?」という、自分に置き換えて考えられる課題を設定した。
- いずれかの立場に立って、グループで対立した意見を伝え合う中で、生徒は自分の考え方の変容に気付いた。

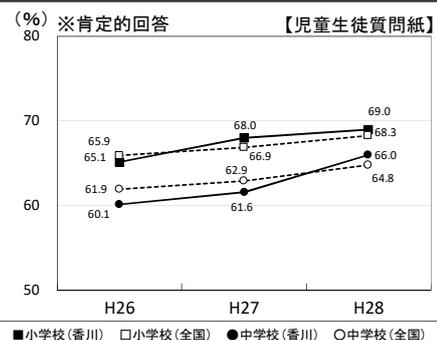


授業では、話し合う活動をよく行っていた



香川県教育センター「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書」
 (平成28年10月)

話し合いで考えを深めたり、広げたりする学習



香川県教育センター「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書」
 (平成28年10月)

② 課題を立て、対話を通して解決に向かう場面の設定

課題の探究では、児童生徒が課題を立て、対話を通して多様な考えを吟味・統合する等、対話を通して解決に向かう場面を設定し、深い学びにつなげましょう。

対話による解決の場面における教師の手立てとして、次のことなどが考えられます。

- ・ 児童生徒が自分の考えをもつ時間を設定し、対話をする必要性を感じられるようにする。
- ・ 教師は、過度な介入を避け、児童生徒の対話による解決の時間を保障する。
- ・ 児童生徒が課題の解決に向けて、思考を可視化しながら互いに意見を比較したり関連付けたりできるようにする。

事例) 高松市立十河小学校
(4年: 社会「わたしたちの県」)

○香川県がもっとにぎわいがある県になるために、香川らしさがアピールできる観点を選択し、各グループでポスターの構成を話し合った。

○グループで考えたポスターの案を互いに発表し合い、もっと工夫したポスターになるように、どうすればよいか吟味した。



事例) 坂出市立坂出小学校
(4年: 社会「ごみのしよりと利用」)

○授業前に、ゴミの分別体験を行い、ゴミに対する疑問をもたせたことで、「ゴミはなぜ分別するのか」という課題が設定され、その課題を解決するために、説得力のある理由をグループで考えた。



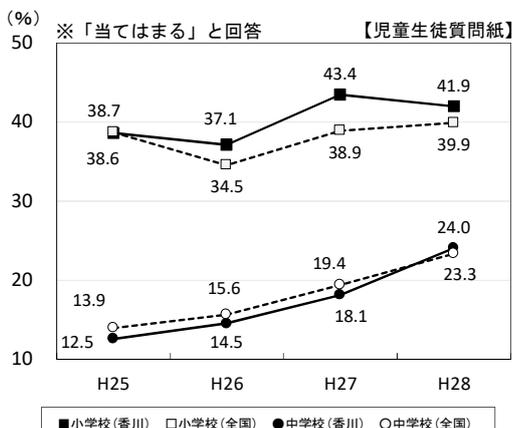
5) 学びの過程やその成果の振り返り

児童生徒が学習の成果を実感し、次時の学習課題に気付くためには、児童生徒に学びの過程やその成果を振り返らせることが大切です。

全国学力・学習状況調査の結果をみると、香川県においては、「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」の質問に対して、「当てはまる」と回答した児童生徒は、小学校で41.9%、中学校で24.0%となっています。

授業の目標(めあて・ねらい)に対する「振り返る活動」を計画的に位置付けることで、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」につながり、学習意欲等を育むことができます。

授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていた



香川県教育センター「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書」
(平成28年10月)

事例) 高松市立牟礼小学校(4年: 算数「何倍でしょう」)

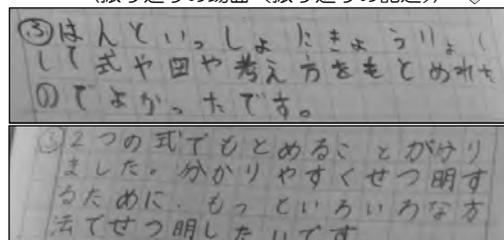
○相手意識をもった話し合い活動の成果を、児童が実感した。

〈授業の場面〉



A: 式、合ってる?
B: 分からん…。けど、まず、ここを求めてから…。
A: そうか…。でも…。

〈振り返りの場面(振り返りの記述)〉



2 学級経営の視点 ～学びに向かう集団づくり～

平成28年12月21日、中央教育審議会において取りまとめられた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、学習活動や学校生活の基盤となる学級経営の充実が求められています。

児童生徒の学習や生活の基盤となるのが、基礎的な集団である学級やホームルーム※です。そのことから、小・中・高等学校を通じた学級・ホームルーム経営の充実を図り、児童生徒の学習活動や学校生活の基盤としての学級という場を豊かなものにしていくことが重要です。

教師は、学級やホームルームにおいて、日頃から児童生徒に、仲間のもつ様々な意見を大切にしようとする意識や一面的な見方で他者を評価しない態度を育てることを積み重ね、支持的風土のある学習の場をつくりましょう。

そして、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善により、児童生徒一人ひとりが自分の存在感をもてるようにし、学習の場を共感的な人間関係を育む「心の居場所」にしましょう。

※ ホームルーム：高等学校における生徒の学校における基礎的な生活単位

1) 学級集団づくり

児童生徒がよりよく成長を遂げるためには、小・中・高等学校を通じた学級・ホームルーム経営の充実を図り、児童生徒の学習活動や学校生活の基盤としての学級という場を豊かなものにしていくことが重要です。

学級・ホームルーム経営の重要な視点は、まずはよりよい集団づくりです。学級集団を構成しているのは、児童生徒一人ひとりです。つまり、個人と集団とは相互関係にあるので、児童生徒にとって望ましい学級・ホームルーム、そして学校などの集団をつくるのが、同時に、児童生徒自らの成長を促進させることとなります。

学習活動においては、児童生徒同士の協働や教職員との対話などを手掛かりに考えること等を通じて、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」を実現していくことが考えられるでしょう。

そこでは、教師の適切な指導により、様々な人間関係を見据えながら、望ましい集団・人間関係づくりを進めていくことが求められます。

問題の発見・解決のプロセスの各場面で、対話的な学びを促す教師の手立てとして、次のことなどが考えられます。

【学級でのよりよい関係づくり】

事例) 綾川町立綾上小学校

○朝の活動でしたことを話したり、帰りの会で1日の振り返りをしたりする交流活動の場を設ける。

○学級における児童一人ひとりの居場所をつくり、安心して友達と関わって学ぶことにつながる。



【成果】

自分のことを素直に表現したり、友達のことを認めたりする日常の活動を継続することで、学び合いの素地を築き、主体的に活動しようとする意欲や態度が育ってきている。

見通しの場面

児童生徒が課題の解決に向けて多様な考えをもつ仲間に関わろうとすることができるよう、教師は集団で解決する必然性のある課題の設定をする。

探究の場面

児童生徒が問い返ししながら相手の思いや考えを理解し、共有しようとしていくことができるように、教師は「問い返し」のある交流への助言をする。

振り返りの場面

児童生徒が他者と共に学ぶことよさを感じることができるよう、教師は、学習成果を他者に伝える場を設定するなどにより、再認識する時間を保障する。

2) 学習指導と生徒指導

児童生徒にとって、学校で最も多くの時間を占めているのは学習指導ですが、学習指導において、児童生徒の人間関係づくりや相互理解の意図をもって行われる教師の働きかけは、生徒指導とも考えられます。

つまり、教師の指導は、学習指導の側面と生徒指導の側面をもってしているといえます。

生徒指導は、「生徒指導提要」（平成22年3月、文部科学省作成）において、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと」と示されています。

また、次期学習指導要領については、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年12月21日)において、「全ての教科等において育む『学びに向かう力・人間性』が整理されることにより、今後、教科等における学習指導と生徒指導とは、目指すところがより明確に共有されることとなり、更に密接な関係を有するものになると考えられる」と述べられています。

さらに、学習指導においても、児童生徒一人ひとりに応じた「主体的・対話的で深い学び」を実現していくために、児童生徒理解の深化を図るといった生徒指導の基盤をつくります。

そのために、児童生徒一人ひとりが自己存在感を感じられるようにする、教職員と児童生徒の信頼関係や児童生徒相互の人間関係づくり、児童生徒の自己選択や自己決定を促すといった生徒指導の機能を生かして充実を図っていくことが求められています。

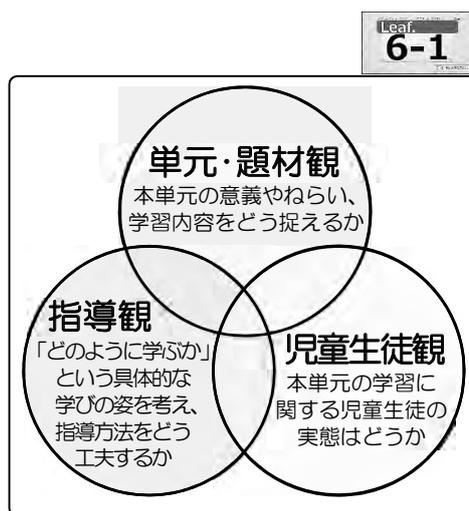


3) 児童生徒への共感的理解

① 児童生徒観を踏まえた指導方法の工夫

児童生徒が主体的・対話的に、深く学んでいく「学びの質」に着目して、授業改善の取組を活性化させていくためには、単元・題材観、児童生徒観を踏まえて、児童生徒が「どのように学ぶか」という具体的な学びの姿を考え、指導方法を工夫していく必要があります。

- (i) 単元・題材観
本単元の意義やねらい、学習内容をどう捉えるか
- (ii) 児童生徒観
本単元の学習に関する児童生徒の実態はどうか
- (iii) 指導観
(i)、(ii)を踏まえ、単元の指導をどのように進めるか、どのような点に留意するか



(ii)の児童生徒観については、次のことなどが考えられます。

- ・客観的データに基づいて、児童生徒の関心・意欲や能力等の実態はどうか。
- ・児童生徒の既習の学習内容や生活経験と、本単元との関連はどうか。
- ・本単元の学習で児童生徒はどのような場面でどのようなつまづきや抵抗感をもつか。

② 学習の場を共感的な人間関係を育む「心の居場所」に

どのような教育活動においても、実践が効果を上げるための基本の一つは、児童生徒理解です。教師は、日頃から児童生徒の表情や言動などから、児童生徒について多面的・総合的に理解していくことが重要です。

学習指導では、児童生徒一人ひとりの可能性を最大限に伸ばし、社会をよりよく生きる資質・能力を育成する観点から、教師は、児童生徒の実態を正しく理解した上で、アクティブ・ラーニングの視点に立った学習・指導方法を工夫改善していくことが求められています。工夫改善にあたっては、先に述べたように、本単元の学習に関する児童生徒の実態に合っているか、児童生徒の意識や思考の流れになっているか、教師の発問・助言や支援の手立てが計画的か、そして、児童生徒一人ひとりのよさを生かし、「主体的・対話的で深い学び」を促すものになっているか、などがあります。

このような、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業は、児童生徒が主体的に学習に臨むだけでなく、他者との対話の中で、多様な考えに触れ、自他のよさを認め合い、共感的な理解を育んだり、コミュニケーション能力を育成したりするなど、「学校・学級の中で、一人一人の存在や思いが大切にされる」環境の成立にもつながっていきます。このことの積み重ねによって、児童生徒一人ひとりが自分の存在感をもち、学習の場を共感的な人間関係を育む「心の居場所」にしていきます。



第Ⅱ章 第1節 1. 学校の教育活動全体を通じた人権教育の推進

(5) 人権尊重の視点からの学校づくりと学力向上

学校教育においては、現在、全ての児童生徒に基礎的な知識・技能及びそれらを活用して問題を解決する力等を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「確かな学力」を育むことが求められている。

「確かな学力」を育む上では、児童生徒一人一人の個性や教育的ニーズを把握し、学習意欲を高め、指導の充実を図っていくことが必要であり、そのためには、学校・学級の中で、一人一人の存在や思いが大切にされるという環境が成立していなければならない。

このように見た場合、校内に人権尊重の理念に基づく教育活動を行き渡らせることは、学習指導の効果的な実施を図る上でも、重要な観点の一つとなるものと考えられる。

学校においては、「確かな学力」を育むためにも、学校全体として「一人一人を大切に、個に応じた目的意識のある学習指導に取り組む」等の教育目標の共通理解を図るとともに、学ぶことの楽しさを体験させ、望ましい人間関係等を培い、学習意欲の向上に努めることが求められている。

人権教育の指導方法等に関する調査研究会議「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕－指導等の在り方編－」（平成20年3月）

4) 保護者との関係づくり

本来、学校や学級は、全ての児童生徒が安心して過ごすことができる場所です。

児童生徒が落ち着いて学校生活を送ることで、保護者の安心感が高まります。そして、児童生徒と保護者、学校の間信頼感が生まれ、学校と家庭が力を合わせて児童生徒を育てていくための基盤が築かれます。教師と保護者は、健やかな成長という共通の願いをもって児童生徒に関わっているのですから、手を携えることができればお互いにどれだけ心強いかわかりません。

学習指導の取組に関しても、児童生徒の生活の基盤である家庭との連携抜きに、成果を上げることは困難です。学校は、各家庭が教育の場として、本来の教育的な意義・役割をもつことを十分に認識しておく必要があります。その上で、学校は家庭との協力関係を築くため、それぞれの児童生徒の家庭環境に対しての理解が必要です。

第3章

学習場面での児童生徒の姿は？

そのために教師はどのようにするの？



問題の発見・解決のプロセスにおける
「主体的・対話的で深い学び」の実現！

1 学習場面における児童生徒の姿と教師の手立て

「主体的・対話的で深い学び」の過程において、児童生徒は、どのように学んでいるのでしょうか。第3章では、香川県教育センター協力学校におけるアクティブ・ラーニングの三つの視点からの授業実践で見られた児童生徒の姿を紹介していきます。また、そのような姿を引き出すための「教師の手立て」について、「問題の発見・解決のプロセス」に沿って、分析・整理しています。

※実践事例の **教師の手立て** … **深** 深い学び **対** 対話的な学び **主** 主体的な学び への「教師の手立て」を示す。

1) 見通しをもつ場面

見通しをもつ場面とは、児童生徒が学習課題を共有し、どのようにすれば課題を解決できるかについてイメージをもつ場面です。また、どのように解決すればよいか予想や吟味をしたり、解決に向けた計画を立てたりします。



この場面では、「知りたい」「できるようになりたい」という気持ちを高めるために、教師は児童生徒の視点に立ち、学習対象との出合わせ方を工夫するなど学習内容に迫る動機付けを行うことが大切です。例えば、

- ・これまでの認識と現実（新しい情報）のずれに気付き、解決の意欲を高める。
- ・体験活動を通して、実社会や実生活における矛盾を知り、解決の必要感を高める。
- ・学習対象への憧れや可能性を感じ、課題への挑戦意欲を高める。

など、児童生徒が人や社会、自然等とのかかわりの中で積極的に学びたくなる課題を、児童生徒の言葉を生かしながら設定していきましょう。

また教師は、児童生徒が課題解決の見通し（結果と解決方法）をもってどのように学んでいくかを想定し、その学びの姿が発揮されるような授業を構想していくことが重要になります。

① 課題の設定をする

児童生徒の学習意欲には、単元や本時の課題設定が大きく関わります。児童生徒の内面を理解しながら、能動的な学習に向かう課題を設定していくことが大切です。

「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためには、能動的な学習に向かう課題を、次の2つの要件から設定していきましょう。

2-1 能動的な学習に向かう課題を設定するための2つの要件 !!	
<p>○主体的な学習 深く考え、自ら解決したくなる課題</p> <p>課題との出合わせ方を工夫し、解決に向けた多様な見方・考え方が生まれる課題を設定することで、深く考えようとする意欲が高まります。</p>	<p>○協働的な学習 集団で解決する必要性がある課題</p> <p>他者に相談したくなる課題、他者との学び合いによって解決できそうな課題を設定することで、協働的に解決していく必要性が生まれます。</p>

2つの要件を満たした課題を児童生徒と共有したとき、たとえ教師から与えられた課題であったとしても、その課題は児童生徒にとって切実な課題となり、自ら学びに向かう姿につながります。

【目的意識をもち、積極的に課題を設定しようとする姿】

事例) 高松市立牟礼小学校 (5年: 総合的な学習の時間「ともに生きる」)

教師の手立て

- 主 目的意識や相手意識を明確にするために、体験と児童の気付きをつなぎ、本時の課題を設定した。(目的意識や相手意識の明確化)
- 主 継続的な関わりの場を設定した。(学びの必然性)

老人ホームの職員の関わり方と、自分たちの関わり方を写真で比較する場を設定することで、違いに気付き、「老人ホームの職員さんのように関わって、もっと喜んでもらいたい」という願いをもとに、課題を設定した。

老人ホームを利用する方が、次回の訪問を楽しみにしていたよ!



写真を見ると、職員の方とみんなの関わり方の違いは何だろう?

【体験活動を通してわき起こる興味や疑問から課題を設定し、明確な目的意識をもつ姿】

事例) 高松市立牟礼小学校 (3年: 国語「はたらく犬について調べよう」)

教師の手立て

- 主 盲導犬を扱う教材文において、実際に盲導犬に出会う体験活動を設定した。
- 深 互いの興味や疑問を伝え合う中で、学習の方向性を共有した。



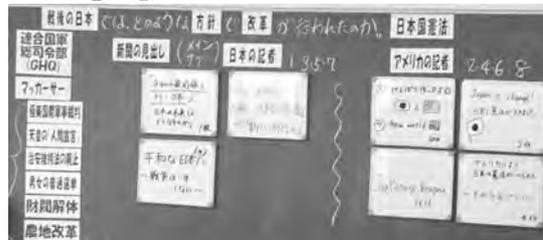
調べたことを誰に知らせたいか、調べる手段や調べたことの表現方法(リーフレットづくり)、そのために必要な学習(限られた紙面に大事な内容を収めるための「要約」)などについて、児童の言葉や思いをつないでイメージマップにし、単元を通した目的意識をもつことができた。

【グループごとに立場を決め、2つの立場から課題に迫ろうとする姿】

事例) 高松市立協和中学校 (3年: 社会「新時代に求められた憲法」)

教師の手立て

- 対 集団で解決する必然性のある課題を設定した。
- 深 一つの事象を2つの立場から考える状況づくりをした。



日本国憲法制定を報じる新聞記事の見出し文を、日本とアメリカの記者に分かれて考える状況づくりをすることにより、担当する立場から戦後日本の改革の方針を具体的に考えていこうと目的意識ができた。

② 目的やゴールを明確にし、解決に向けた方向付けをする

児童生徒が見通しをもつには、まず、学習の目的やゴールを明確にすることが大切です。そして、課題を解決するにはどうすればいいか、その方法について予想し、予想が合っていればどのような結果になるかをイメージすることです。

ここで、解決に向けた方向付けをするときには、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、課題をどのような視点で捉え、どのように考えていくかが必要になります。例えば、

- ・ 解決のために使える情報や知識・技能を想起する。
- ・ 見いだした関係性や傾向から、解決方法を選んだり創造的に考えたりする。
- ・ 調査方法や追究方法を吟味していく。(既習事項や経験などから自分なりに考えたり、仲間と考えを共有したりして解決方法を吟味する。)

などがあります。

このような見通しをもつために教師は、各教科等の特質に迫る方向付けを想定し、解決するための方法について、吟味したり共有したりする時間を設定します。特に、自己選択や自己決定できる場の設定は、児童生徒の積極的な取組を促します。また、見通しの場面における児童生徒の予想や考えをあらかじめ可視化しておくことで、最後の振り返りの場面で、自己評価や相互評価の視点に生かすことができるでしょう。

【困難な課題を解決するために、見通しをもつ姿】

事例) 綾川町立綾上小学校 (6年: 国語「資料を生かして呼びかけよう」)

教師の手立て

- 深 一人で解決するには、困難さが生じる状況を設定した。(困難性のある課題の設定)
- 深 学ぶ目的を意識できるように、他教科と関連させた課題を設定し、課題の解決の意義を共有した。
- 対 互いの構成メモについて助言し合えるようにチェック項目をつくり、考える視点の共有化を図った。

6年生として取り組んでいる活動(学校をよりよくする活動)に、5年生が進んで協力してくれるような表現物を作ろう。

学校がよくなるように、6年生として、この課題を解決しよう。



国語で学んだ方法を使って、同じ考えの友達と協力しながら解決しよう。

成功すれば、学校がもっとよくなるよ。

【ゴールをイメージしながら見通しをもつ姿】

事例) 高松市立十河小学校 (2年: 生活「ときどき わくわく まちたんけん」)

教師の手立て

- 主 目的意識を明確にした。
- 主 体験(町探検)と学びをつないだ。
- 深 ゴールをイメージするために、教師が解決の姿の一例を見せた。

あんなパンフレットを作ると、町のよさを分かってもらえそうだよ。



全校生に、自分の住んでいる町のよさをもっと知ってもらうために、町のよさをパンフレットにまとめようとしている児童。教師が完成したパンフレットの一例を示すことで、ゴール像をイメージしたり、完成するパンフレットに憧れをもったりしながら活動することができた。

【課題解決のための視点を共有することで、見通しをもつ姿】

事例) 香川県立丸亀高等学校 (2年: 外国語・英語表現Ⅱ「Part3 Lesson1 プレゼンテーション」)

教師の手立て

- 深 課題解決の方法についてグループで話し合い、クラスで共有する場の設定をした。
- 対 ホワイトボードを用いて可視化を行った。



プレゼンテーションを効果的に聴衆に伝えるために、発表者がどのような点を意識したらよいかをクラス全体で共有した。



2) 探究する場面

探究する場面とは、児童生徒が課題の解決に向けて、情報を収集したり、様々な情報を比較・関連付けしながら考察したりする場面です。また、見通しの場面での予想や仮説を実際に試し、試行錯誤しながら解決につながる選択や判断をすることもあるでしょう。

この場面では、単に課題を解決すればよいのではなく、多様な他者との対話や、各教科等の特質に迫る学習活動を重ねながら、学びを深めることが大切です。例えば、

- ・自分の考えに根拠をもち、知識を相互に関連付けてより深く理解する。
- ・多様な情報や考えを吟味し、それらを統合して自分の考えを形成する。
- ・思いや考えをもとに、創意工夫し、表現する。

など、設定した課題を児童生徒が自ら探究し解決していく場面を設定していきましょう。

そのために教師は、相手や集団を変えて対話を重ねたり、思考を可視化したりするなど、児童生徒の思いや考えを表現できるように支援を行うことが有効です。「分かっているけれど、うまく言えない」「自分と友達の考えを比べると、その違いに気付いた」「友達に自分の考えを説明しているうちに、自分で何が言いたいのか分かってきた」など、思考・判断・表現することを通して、自らの考えが広がったり深まったりするといえます。ただし、ここで留意したいのは、教師は学びのプロセスの中で、児童生徒に「教える場面」と児童生徒が「思考・判断・表現する場面」を効果的に関連付けた授業を構想することが大切になります。

① 話し合い場面での課題を明確にもつ

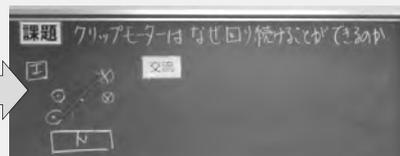
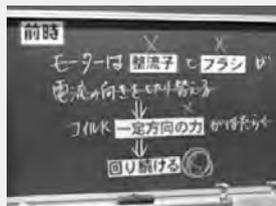
授業では、児童生徒が話し合う目的や必然性を感じていない状態のままで、「では、今からグループで話し合しましょう」と教師から指示し、話し合い活動に入ることがありませんか。児童生徒にとって「話し合しましょう」という声掛けでは、「話し合うこと」が目的となってしまう、課題の解決に向けた話し合いとはなりません。そこで、話し合いの場面で教師は、何について話し合うのか、その意図とゴールを児童生徒と共有し、具体的な方向付けをする必要があります。また、教師は話し合う児童生徒の思考の過程を的確に見取り、「課題に対してどんな意見が出ているの?」「この2つの考えはどのように違うの?」など、適切な介入も必要となるでしょう。

【明確な課題意識のもと、自分なりの考えをもって互いの考えを交流する姿】

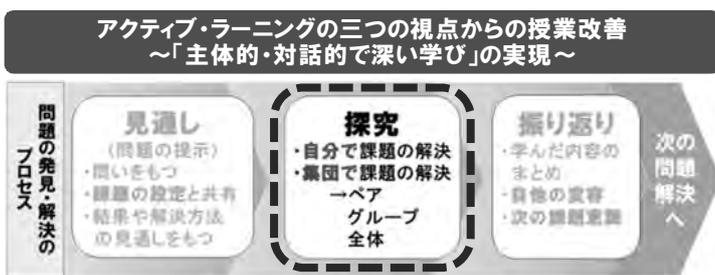
事例) 観音寺市立観音寺中学校(2年:理科「電流と磁界」)

教師の手立て

- 主** クリップモーターの演示から、前時との違いに気付くことで、興味や疑問が起こる状況づくりをした。
- 対** 話し合い活動の前に自分の考えをもつための時間を確保した。



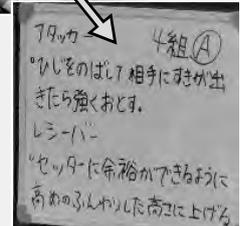
教師の演示から「なぜ?」という疑問が生まれ、前時の市販のクリップモーターとの違いを全体で共有した。これをもとに、本時の課題について自分の考えをもち、実物に触れながら互いの考えを交流することができた。



事例) 高松市立協和中学校 (3年: 保健体育「バレーボール」)

教師の手立て

- 対** 話し合いの視点を明確にもち、多様な考えをボードに示す場を設定した。
- 主** 前時にグループの課題を明確にすることで、課題を解決するための方法について事前に各自で調べる状況をつくった。



各自で解決につながる情報を収集し、その情報に基づいた考えをもった上で話し合いを行ったことにより、グループの方向性が明確になり、その後のグループ練習の内容や仲間への言葉かけが具体的なものになった。

② 多様な考えを吟味する

多様な考えを吟味するには、まず、自分の考えをもつことが必要になります。ただし、しっかりとした考えをもてず、「たぶん、〇〇ではないかな?」「ここまでは分かるけれど、まだよく分からないところがある」ということもあります。

そこで、多様な考えをもつ他者と対話や議論を行い、その様々な考えの中で、最も正解に近いと判断できる最適解を見いだしたり、正解だと思われているものに対して確かめたりすることが考えられます。特に、「なぜ、そのように考えるのか」と判断する理由や根拠について話し合うことで、互いの考えを受け止めたり判断したりしながら学ぶことにつながります。

【自分の意見をもち、討論することで多様な考えを吟味する姿】

事例) 坂出市立坂出小学校 (6年: 家庭「暑い季節を快適に」)

教師の手立て

- 主** 学びと生活をつなぎ、目的意識を明確にした。
- 主** 名前カードでお互いの考えを可視化した。
- 深** 共通体験を多面的・多角的に捉える場を設定した。
- 対** 少数意見を価値付けた。



快適に過ごすには、制服の下に下着を着るのと着ないのではどちらがいいか、それぞれの根拠をもとに討論を行った。さらに解決のために実験を行い、実験結果をもとに再度話し合った。

【自分の考えの根拠に基づいて話し合いながら、互いの考えを吟味する姿】

事例) 高松市立牟礼小学校 (6年: 社会「3人の武将と天下統一」)

教師の手立て

- 主** 自己選択できる課題を設定した。
- 深** 自分の考えを説明しながら操作できる「思考ボード」を活用した。
- 対** 根拠のある交流の場を設定した。
- 対** 「誰(商人、僧、百姓、武士、大名、天皇など)に対しての影響が大きかったのか」という考える視点を明確にした。



「天下統一に一番影響を与えた武将は、一体誰か」について討論を行う場では、「自分が選択した武将こそ、一番影響を与えたはずだ」と、自分の考えに根拠をもち、その根拠をもとに話し合いながら吟味しようとする姿が見られた。

③ 思考の可視化を行う

学びを深める手立ての1つとして、児童生徒の思考が見える形にすることが有効です。互いの考えを比較・関連付けし、それらが整理・統合される過程では、可視化によって思考が活性化され、学びの深まりが促されます。

そのために教師は、以下に示すような可視化の目的とそのよさを児童生徒と共有し、学習のねらいに応じた可視化の工夫をしていくことが大切になります。

Leaf
4-3

可視化の目的とそのよさを共有する

教師は、どのような目的のために思考を可視化するかを明確にし、児童生徒とともにそのよさを共有することが必要です。

<p>〈可視化するよさの例〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○多様な考えの共有ができる ○考えを修正したり、関係付けたりできる ○学びの過程を振り返ることができる 	<p>〈可視化する対象の例〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○課題や解決方法を決定するまでの過程 ○互いの考えの相違点や関連性 ○自分の考えや意識の変容
--	---

ただし、思考の可視化はあくまで、思考を広げたり深めたりするための方法なので、可視化することが目的ではありません。

また、各教科等の特質に応じた可視化の方法があり、解決に必要な言葉や図、表、絵、動作等を効果的に使い、互いの考えを自由に伝え合ったり、認め合ったりするなど、学びに向かう力を発揮させていくことが重要です。

【可視化によって、互いの考えの変化を意識しながら学ぶ姿】

事例) 高松市立十河小学校 (6年: 社会「新しい日本、平和な日本へ」)

教師の手立て

対) タブレットPCと大型TVを活用して、思考の変化が互いに見えるようにした。(授業のねらいにあった思考の可視化)

↓

課題に対する思考の変化が、タブレットPCによりテレビ画面に表示されることで、互いの思考の過程を共有することができた。



【抽象的概念を自身の実際の生活に結びつける姿】

事例) 香川県立丸亀高等学校 (1年: 公民・倫理「中国思想(孔子と儒家の思想)」)

教師の手立て

深) 孔子の仁・礼が人間相互のコミュニケーションツールとして重要な役割を果たすことを理解させるため、4つのケースをペアで体験する場を設定した。

(カードの4つの受け取り方をペアで演じ合う)

A: うれしくない・頭を下げない

B: うれしくない・頭を下げる

C: うれしい・頭を下げない

D: うれしい・頭を下げる

・どのような印象を受けたか記録し交換する。



↓

内面と外面を楽しく演じ分け、それらがどのような意味をもつかを実感した。礼がもたらす影響について理解し、抽象的概念を自身の実際の生活に結びつけられていた。授業後、行動に変容が現れた生徒もみられた。学習内容を抽象的な知識に終わらせず、生活の糧として身に付ける契機となった。

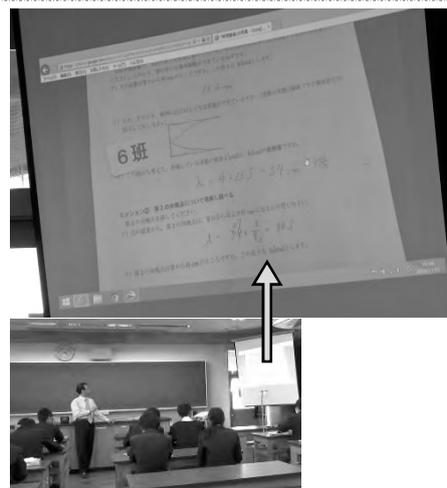
【実験の過程と結果を多面的に捉えようとする姿】

事例) 香川県立高松北高等学校(2年:理科・物理基礎「波」)

教師の手立て

深 班の考え(次の共鳴点の位置の予測とその根拠等)を書いたワークシートをスクリーンに映し出し、「なぜそうだったか」と問いかけた。また、間違っていた班には「どうして間違ったのか」と問いかけながら解説した。

各班の実験の過程と結果、そこから導き出される予測を書いたワークシートを写真に撮り、スクリーンに表示することで、他の班との考えの違いが可視化され、多面的に捉えることができた。このことにより、次の目的意識が明確になった。



④ 問い返しのある学び合いを行う

深まりのある学び合いにするためには、聞く側が相手の思いや考えに対し、どのように聞き、応答するかがポイントです。そのために、まず教師自身も児童生徒の言葉をよく聞き、「考えの理由は?」「こんな場合はどう?」などと問い返し、思考を揺さぶるとともに、自然な対話を促します。児童生徒は、そのような考えを表出していく過程を繰り返すことで、考えが広がったり深まったりします。



〈児童生徒の学びが深まる過程〉
中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年12月21日)をもとに香川県教育センターが作成

[効果的な「問い返し」例] ※決して型に沿うことが目的ではありません。児童生徒自身が発する言葉が大切です。

① 共感・称賛	② 疑問	③ 確認	④ 納得・理解	⑤ 具体・反論	⑥ 一般化・明確化
<ul style="list-style-type: none"> • いいね。すごいね。 • なるほど。 • そんな考えもあるんだね。 	<ul style="list-style-type: none"> • どうして? • どこからそう考えたの? • ~について、質問するね。 	<ul style="list-style-type: none"> • あなたが言いたいことをまとめると、~ということだね。 • 要するに、~だね。 	<ul style="list-style-type: none"> • あなたが考えたのは、~ということかな? • 例えば、~かな? • ~と同じことかな? 	<ul style="list-style-type: none"> • だって、~のときはどうかかな? • この資料からは分からないよ。 	<ul style="list-style-type: none"> • ○○は~として考えられるから、△△だね。 • ここまでをまとめると、~ということがいえそうだね。

香川県教育センターWebサイト「アクティブ・ラーニングノススメ in かがわ」Leaf. 3参考資料より

また、どの校種においても大切にしたい「問い返し」のある学び合いでは、以下の点に留意しましょう。

<p>相手に寄り添う応答</p> <p>話をうなずきながら聞いたり、互いの意見を認め合う発言をしたりする等、相手の考えに対して共感的に応答する態度を大切にすることで、安心して発言できる学級の風土をつくります。</p> <p>自他の差異に気づき、問う</p> <p>「どうして?」と理由や根拠を問いたくなるには、自他の考えが比べられるように、それぞれの考えを可視化することが有効です。</p>	<p>他者の考えを引き出す「問い返し」</p> <p>「どう思う?」と他者の考えを求める「問い返し」をしたくなるには、どの教科等においても児童生徒が明確な目的意識をもつことが必要です。</p> <p>また、児童生徒自身が「問い返し」によって学習が深まったことを振り返ったり、教師も思考を促す問いかけをしたりすることで、その有用性を実感できるようにしましょう。</p>
---	--

【「問い返し」をきっかけに、多様な考えを分かり合う姿】

事例) 観音寺市立観音寺中学校 (1年: 道徳「友情を深めるためには」2-(3))

資料: 「心のつながり」(出典: 学研「かけがえのない きみだから」)

教師の手立て

- 深 アンケート結果から課題設定を行い、課題意識を高めた。
(自分にとって身近な課題の設定)
- 対 心情曲線(読み物資料の登場人物の心情の移り変わり)を活用した思考の可視化を行った。



↓

学級へのアンケート結果から、「携帯電話は友人関係を深めるために必要かどうか」を考える課題が生じた。主人公の揺れ動く気持ちを心情曲線として可視化することで、個々の考えの違いが明確になり、その結果、「なぜそう考えたの?」という問い返しが生まれ、多様な考えを分かり合う深い学びへとつながった。

【「問い返し」ながら、他者の考えを理解しようとする姿】

事例) 高松市立牟礼小学校 (4年: 算数「見積もりを使って」)

教師の手立て

- 対 ワールドカフェ方式の導入により、他者の多様な考えを伝え合う場を設定した。
- 対 考えを可視化しながら説明できるミニホワイトボードを活用した。



↓

児童は、他の班の考えを聞いた後、自分の班に戻ってきて説明を行う。聞いて理解したつもりだった考えを自分の班の友達に説明すると、「これはどういうこと?」と問い返しが起こった。その後、「こういう考えだったのではないかな?」と、班の友達と話し合いながら、他の班の考えを理解していた。

【「問い返し」ながら、イメージの共有を図ろうとする姿】

事例) 綾川町立綾上小学校 (4年: 国語「助け合って生きる生き物たちについて説明文にまとめよう」)

教師の手立て

- 深 文章中の言葉についての捉えが、児童によって違うことを意識させた。
- 対 同じ段落を選択した児童が同じ班になる小集団設定を行った。



↓

文章中の言葉の意味について、「例えばどういうこと?」と教師が問いかかることで、児童はそれぞれの言葉の捉えが違うことに気付いた。そこで、どういうことを意味しているのか、お互いのイメージを話したり問い返したりしながら、イメージの共有を図ることができた。

【ペアを変えながら互いの考えを聴き合い、解決の方法を探る姿】

事例) 香川県立高松北高等学校 (1年: 数学・数学A「図形の性質」)

教師の手立て

- 深 複数の考えを比較・関連付けする場を設定した。
- 対 目的に応じたペアや小集団による学び合う場を設定した。
- 対 互いの考えを聴き合う関係づくりを日頃から形成する。



↓

分かったこと、まだよく分からないことについて、ペアを変えながら他者の考えを聴くことで自分とは異なる考えに気づき、解決へのヒントを得ることができた。

⑤ 目的に応じた小集団で学ぶ

講義形式の一斉授業から、児童生徒が能動的に学ぶ授業へと、授業の質的転換を図るには、小集団での学びと学び合う環境づくりは欠かせません。また、交流場面における手立ての工夫で、児童生徒の学習意欲をさらに高めたり、考えをもたせたりすることができます。

ペアやグループ学習は、それぞれに特性があり、期待される効果も違います。学習内容、学習場面に照らし合わせて、適切な学習集団を設定することで、児童生徒の学びに広がりや深まりが期待できます。日頃から目的に応じた柔軟な集団設定を行うことで、問題解決の過程が協働的なものになるよう工夫しましょう。

集団の規模	個人	ペア	少人数のグループ	全体
特性	<ul style="list-style-type: none"> 一人じっくりと考えることができる。 ▲自分の考えをもつことができない児童生徒への支援が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 全ての児童生徒が参画できる。 気軽に短時間で交流できる。 聞く・話す立場が決まり、目的が明確になる。 ▲ペアの関係性に留意が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 3人以上で考えをつくり、自信がもてる。 多様な意見を比較・統合し、考えが広がったり深まったりする。 ▲発言できない児童生徒がいる可能性に留意が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> より多様な意見を比較・統合し、考えが広がったり深まったりする。 多様な考えをもとに、学級全体で解を集約したり、共有したりできる。 ▲安心して考えを表現しにくい雰囲気になったり、参加しない児童生徒がいたりする可能性に留意が必要。

ペアやグループで交流する活動では、一人ひとりがしっかりとした考えを必ずもたなければならないことはありません。一人で少し考えてみた後、ペアやグループを作るという方法もあります。分かりかけていることを仲間に話しかけ、一緒に考えることで、安心感をもって交流できます。自分だけでは解決が難しい児童生徒も多様な見方・考え方にふれ、内容を理解したりお互いに認め合ったりすることができます。

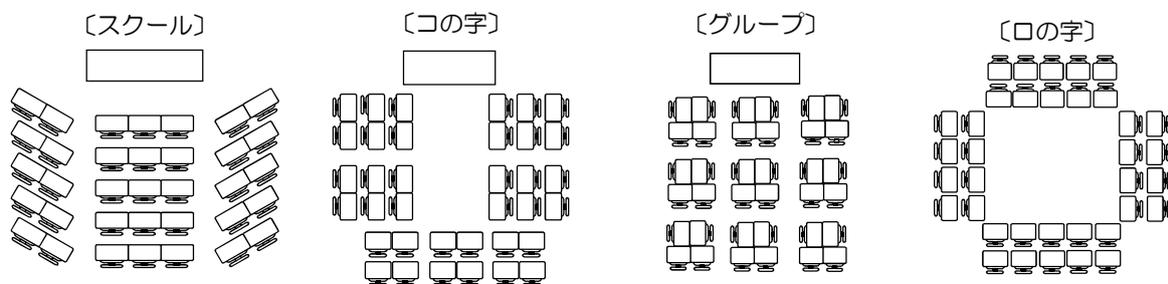
また、ペアやグループになったとしても、個々の思考と集団での思考を組み合わせながら学び合いを進めることもあるでしょう。児童生徒の視点に立った学び合いを展開していくことが大切です。

また、机の配置を工夫することで学び合いを活性化させることもできます。

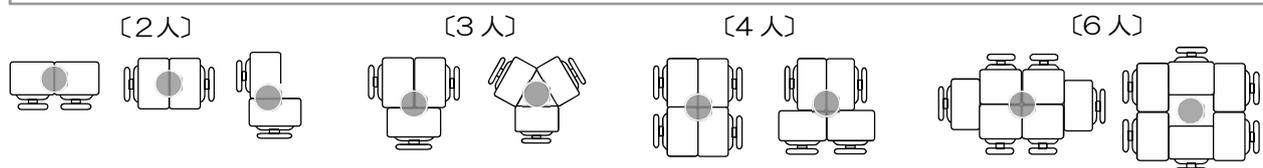
例えば、全体であればスクール型やコの字型に、グループは向かい合わせにするなど、授業展開に合わせて机の配置をアレンジすると、活動モードにチェンジできます。

そのために教師は、机の移動の方法やその目的について児童生徒が理解できるように、ルール（授業のあるべき姿）を日頃から共有しておきましょう。

Leaf 2-2 学び合いを活性化するフローデザイン！



ペアやグループになるときは、話し合いの中心（●）となる場所を意識し、机をぴったりとくっつけます。



【グループ内での自分の役割を意識し、話し合いを進める姿】

事例) 香川県立高松北高等学校(1年:国語・国語総合B「伊勢物語『筒井筒』」)

教師の手立て

- 対 グループ内で全員に役割がある状況づくりをした。
主 課題について話し合う場を生徒に委ねた。



全ての生徒が自分の役割を自覚し、話し合いや発表を円滑に行うことができた。

【ペアでの対話を繰り返す過程で、対象への気付きを広げる姿】

事例) 綾川町立綾上小学校(1年:生活「おおきくそだて わたしのアサガオ」)

教師の手立て

- 深 ペアでの対話を継続的にいき、互いの思いや考えを比較する場を設定することで、アサガオの成長や世話への気付きを広げる状況づくりを行った。
対 質問形式によるペアでの対話を行った。(質問する視点の共有)
主 友達からのアドバイスや称賛によって、観察や世話等への意欲の継続化を図った。



ペアでの対話を継続的に行った結果、気付きの広がりとともに、どの児童も自分の思いや行った世話を認めてもらえる場をもつことができ、観察や世話への意欲をもち続けることができた。

【相手意識をもち、小集団で学ぶ姿】

事例) 高松市立協和中学校(3年:理科「方位と時刻はどのようにして決まるのか」)

教師の手立て

- 深 小集団内で自由に操作しながら説明できる教具を準備した。
対 自他の考えを受容し合う風土づくりを日頃から行っている。



地球と太陽の位置と、方位と時刻の関係について、地球と太陽の位置を操作できる装置を使用しつつ、自分の考えを説明しながら考えることができた。

小集団による学び合いを設定したことで、「どうしてそう考えるの?」と説明を求めたり、操作できる装置を動かしながら自分の考えを分かってもらえるように説明したりする姿が見られた。

【気付きを共有しながら小集団で学ぶ姿】

事例) 高松市立協和中学校(2年:美術「鑑賞学習～風神雷神図屏風～」)

教師の手立て

- 深 教材に対して多様なアプローチを試みる学習を設計した。
深 多様な考えや感じ方が生まれる課題を設定した。
対 一人ひとりの感じ方の違いをあることを教師から提示し、必要感のある交流の場の設定を行った。
主 自由交流によって、他者の気付きを共有する場を設定した。



「風神雷神図屏風」の作者の意図に迫るために、動画でイメージを広げたり、対話しながら互いの気付きを共有したりすることで、作者の工夫した点について語り合うことができた。

3) 振り返りの場面

振り返りの場面とは、課題の解決に向け得られた考えや結果を自分の言葉でまとめたり、自らの学びの過程について振り返ったりする場面です。また、見通しの場面での予想や仮説に対してどのような結果になったのかを考察したり、学習の成果から新たな疑問や課題が生まれたりすることもあるでしょう。

この場面では、学習のまとめをするだけにとどまらず、学んだことを自分の内面からじっくりと見つめ直し、自分もっていた知識・技能と関連付けたり、自ら学習活動を意味付けたりしながら、学びを深めることが大切です。例えば、

- ・得られた結論について仲間と話し合ったり、別の場面に活用したりして、より理解を深める。
- ・既習の学び、実社会や実生活等と関連付けることで、学んだことの意味に気づき、新たな学びにつなぐ。
- ・自己の調べ方や学び方等を振り返り、自分の考えの変容や成長を自覚する。

など、児童生徒自身が自ら学びの成果やその過程を見つめる場面を設定しましょう。

そのために教師は、児童生徒の言葉を生かした学習のまとめをすることがポイントになります。そして、単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立て、何をどのように振り返るのかを想定し、自己評価や相互評価などを学習活動として位置付けていきましょう。

また、振り返りの場面での児童生徒の姿や表現物は、児童生徒の学習状況を評価したり、教師の授業改善の視点として生かされたりしますが、ここでの評価は、ねらいの達成のみならず、学びの過程も捉えていくことが重要です。

Leaf
6-2

学びの過程を可視化し、多面的・多角的に評価する！

アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくりでは、「どのように学ぶか」が重要となるため、授業の最終場面に行われる総括的な評価だけでは、単なる「できた」という評価にとどまります。形式的な評価として、児童生徒の学びの過程を可視化し、その学びを多面的・多角的に捉えることで、「できた」の質的な評価をすることができるのです。

教師には、そのような児童生徒の学びの質を捉えることのできる目を培っていくことが求められています。

多面的・多角的な評価では

児童生徒の学びにおける成果やその過程を多様な表現方法を用いて、学びの足跡として残します。その際、その場面における児童生徒の学習状況を的確に評価できるよう、様々な評価方法の中から、適切な方法を選択して評価していきましょう。

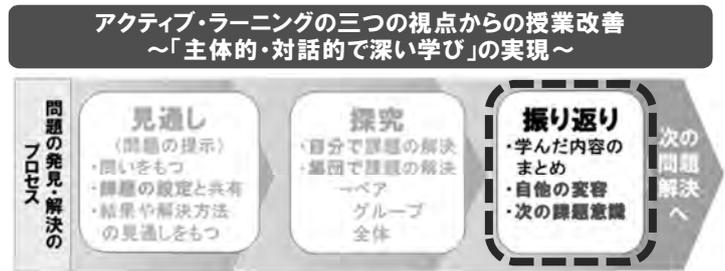
① 自己評価を行う

自己評価では、「学習内容に関する視点」と「学びの過程に関する視点」の2つの視点から振り返ります。

Leaf
6-3

〈振り返るための視点の例〉

学習内容に関する視点	学びの過程に関する視点
○知識・技能の定着	○自己の学びに対する変容や成長
○既習事項や経験との関連性	○課題の解決に役立った事柄や方法
○実社会や実生活への活用	○新たな疑問や課題へのつながり



この自己評価については、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）において、児童生徒が「自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付けることが適当である」と述べられています。その際、教師が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていくことの重要性も挙げられています。

したがって、知識量を問うペーパーテストの結果や、特定の活動結果による評価だけに目を向けるのではなく、教師は児童生徒が行っている学習そのものにどのような価値があるかを認め、児童生徒自身にもその意味に気付かせていくような学びが求められます。この学びの積み重ねによって、児童生徒は自ら進んで学ぶために、自己の学びの過程を振り返り、その後の学びの方向性を自らつくり出す姿へと高められます。このような学びは、児童生徒自身がつくるPDCAサイクルともいえるでしょう。

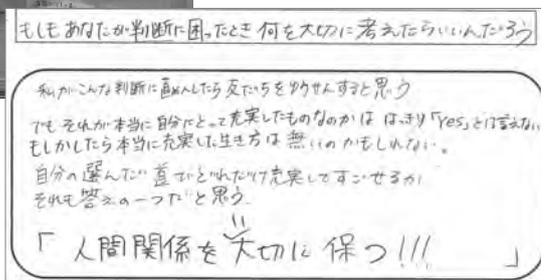
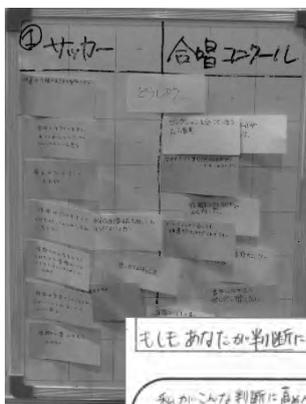
【学んだことを自分の言葉で語り合う生徒の姿】

事例) 高松市立協和中学校（2年：道徳「自主、自律、自由と責任」）

資料：「どうしたら良いんだ・・・」（自作資料）

教師の手立て

- 【深】 生徒にとって判断に迷う場面を取り上げ、課題意識を高めた。
- 【対】 主人公やその友達の考えを付箋紙に対談形式で表し、揺れ動く心が見えるようにした。
- 【深】 教師から「自分だったらどうするか」と問いかけ、自分の判断の仕方について、自分の言葉で書き表す場を設定した。



サッカーのセレクションの日と、校内合唱コンクールの日が重なったらどうするかを、「どうしよう」「でも」と意見を対立させながらグループで話し合う姿が見られた。そのような話し合いを通して揺れ動いた心をもとに、「もしも自分だったらどうするか」について理由を考えながら書き表すことができた。

【学びの過程を振り返る児童生徒の姿】

事例) 坂出市立坂出小学校

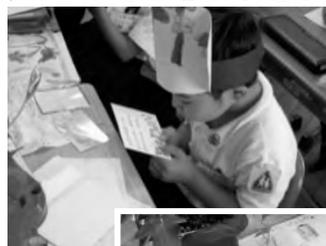
（1年：生活「ぐんぐん のびる ～いいね あさがおさん みんなで ひらこう あさがおパーティー～」）

教師の手立て

- 【深】 自己の学びの場を振り返る場を設定した。
- 【主】 単元を通して、学びを積み上げる状況づくりを行った。

授業の終末場面で、教師が、児童一人ひとりに対してアサガオとの関わり（観察や世話など）の中でよかったところを手紙にして渡した。

この手紙が、今までの自分の活動を振り返るきっかけとなり、自己の成長に気付くことができた。そして、自分への手紙として、自分自身のよさについて書き表す姿が見られた。



② 相互評価を行う

相互評価においても前述した2つの視点から行います。ここで最も大切なのは、互いを信頼し認め合う関係性が土台にあり、仲間と共に学ぶことのよさを実感していることです。したがって、相互評価は授業の終末だけでなく、授業の冒頭や途中であっても効果的に取り入れていくことができます。

また、児童生徒は他者からの評価を受けることで、自分では気付かなかった自己の考え方や、解決の過程のよさに気付くことができます。さらに、自分自身も他者への評価を通して、学習の過程での気付きや感じ方の違いを知り、自己の考えを見つめて自分なりに見直したり、新たな見方・考え方を広げたり深めたりしていくこともできます。

このような相互評価を通して学びの有用感が高まることにより、児童生徒は多くの人との関わりの中で学ぶ価値や自分の成長をさらに実感します。

【学びの過程に自信をもつ児童生徒の姿】

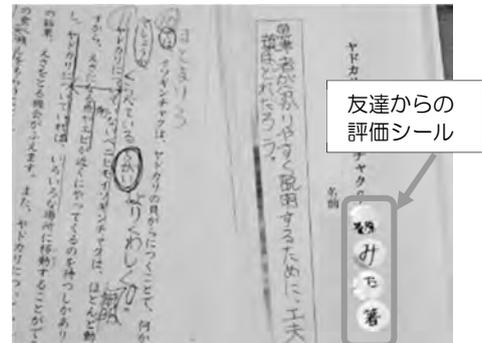
事例) 綾川町立綾上小学校 (4年: 国語「助け合って生きる生き物たちについて説明文にまとめよう」)

教師の手立て

対 他者からの評価をもらう場を設定した。

授業の終末に、学びの過程で素晴らしかった友達を評価し、シールを渡す活動を設定した。シールを渡す際は「～さんが〇〇とってくれたから、よく分かったよ」と理由を説明していた。

この活動により、自分の学びに自信をもったり、学ぶ際に大切なことを共有したりできていた。



【互いに作問し、解答することで、学習内容の定着を図る姿】

事例) 香川県立丸亀高等学校 (2年: 数学・数学Ⅱ「図形と方程式」)

教師の手立て

深 学習した内容に関する問題を個人で作問する場を設定した。

対 作問した問題について班で話し合い、板書する1題を決定する状況づくりをした。

深 板書された異なる班の問題の解答について各班で考える場を設定した。



教師が想定しない発想による問題が出され、多様な考えがあることに気付いた。また、様々な問題に挑戦することで、内容の理解が深まったことを自己評価することができた。

【自分の伝えたいことが理解されているかどうかを確認する姿】

事例) 香川県立高松北高等学校

(3年: 外国語・コミュニケーション英語Ⅲ「Lesson 2 A Miraculous Pianist」)

教師の手立て

対 より多くの生徒同士でペア活動ができるようルールを設定した。



様々な表現と出会い、自分自身の伝えたいことが理解されているかどうかを、相互評価によって確認する姿が見られた。

③ 新たな課題に出会う

振り返りの場面では、学習内容に関する視点として、分かったことやできるようになったことだけでなく、「まだよく分からないこと」「もっと知りたいこと」について触れることも大切です。また、分かったことを仲間に伝える場面を設定することで、自分の考えをうまく伝えられなかったり、話しながら考えることで、自分の考えが整理され新たな疑問が生まれたりすることに気付くことができるでしょう。

そのために教師は、教材や他者との対話をする時間を設定したり、時には教師からさらに思考を揺さぶる発問や情報提供をしたりすることが考えられます。

【課題が解決したことがきっかけとなり、新たな課題が生まれる姿】

事例) 高松市立牟礼小学校 (2年: 生活「大きくなあれ! わたしの野菜さい」)

教師の手立て

- 深 児童の振り返りの中から出てきた思いや願いを次の課題につなげた。
- 深 国語科「たんぼぼ」での学習を生かした「おやさいずかん」をつくる学習へ広げた。
- 主 相手意識が明確な課題を新たに設定した。



〈児童の振り返り〉



〈おやさいずかん〉

「野菜を育て収穫する」という課題解決を行った児童は、振り返りの中で「今度は野菜名人の方にお礼を言いたい」「見付けたことや分かったことを図鑑にまとめて、家の人に見てもらいたい」等の思いを書いていた。この思いを次の課題につなぎ、「おやさいずかん」づくりへと発展することができた。

【新たな課題に気付き、学び続けようとする姿】

事例) 香川県立高松北高等学校 (1年: 数学・数学I「図形と計量」)

教師の手立て

- 深 多様な考えを吟味する解決過程の場を設定した。
- 主 自ら挑戦したくなる問題を提供した。



1つの問題に対する多様な解き方を共有し合い、簡単に解決できる方法にたどりついた生徒がいた。そこへ、教師が新たな問題を提供することで、生徒は、解決の方法を生かし自ら問題を解こうとしていた。

【新しい視点に出会うことで、考えを見つめ直す姿】

事例) 観音寺市立観音寺中学校 (3年: 道徳「生命の尊重」3-(1))

資料: 「忘れられないご馳走」

(出典: 学研「かけがえのない きみだから」)

教師の手立て

- 深 思考を揺さぶり、プロセスを再考する場の設定をした。
- 主 一人ひとりの考えをじっくり聞く時間を確保した。



資料をもとに、「飼っていたヤギを食べるか食べないか」について議論し合った後、教師が資料の中の『食べるって、こういうことさ』という意味について問うことで、新しい視点が生じ、自分の考えを再度見つめ直す姿につながった。

2 児童生徒の姿と教師の手立て〈一覧〉

アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善で取り組んだ実践で見られた「児童生徒の姿」と、そのための「教師の手立て」について、「問題の発見・解決のプロセス」と「主体的・対話的で深い学び」の各視点で分析・整理しました。

1) 授業における児童生徒の姿



	問題の発見・解決のプロセス		
	見通し	探究	振り返り
深い学び	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気づきや疑問を表現している。 課題を明確にもっている。 課題の解決のための視点やゴールのイメージを明確にもっている。 課題の解決の方向性を見だし、その解決方法を吟味している。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な考えを比較・関連付けし、解決している。 自分の考えの根拠をもち、その考えを検証したり、最適解を求めたりしている。 解決のための多様な判断材料を集めて精査し、自分の考えを形成している。 解決のために、既習事項や経験と重ね合わせたり、つないだりしている。 1つの課題が解決しても、次の問いが生まれている。 	<ul style="list-style-type: none"> 分かったこと（できたこと）とまだよく分からないこと（できていないこと）を整理している。 得られた解を自分の言葉でまとめ表現している。 学んだことの意義や、その教科等の特質に応じた学びの面白さを実感している。 学習成果を別の場面で生かしたり、他の解決方法を試したりしている。 自分の解決の仕方を見つめ直し、そのよさや課題を表現している。 次の学びにつながる課題を見いだしている。
対話的な学び	<ul style="list-style-type: none"> 他者の考えとの違いに気づき、その理由を知ろうとしている。 考える視点を他者と共有しようとしている。 課題を解決するために、多様な考えをもつ他者に関わろうとしている。 課題の解決につながりそうな情報（資料）を探したり、選択・吟味したりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 考えの根拠をもって、多様な表現で伝えようとしている。 問い返ししながら相手の思いや考えを理解し、共有しようとしている。 互いの思いや考えを納得するまで伝え合い、分かり合おうとしている。 解決策につながる情報（資料）を収集・精査している。 	<ul style="list-style-type: none"> 学んだことや新たな疑問等を他者に伝えようとしている。 他者と共に学ぶことのよさを実感している。 他者の学びのよさに気づき、伝えたり自分に生かしたりしている。 他者評価を通じて自分の学びのよさや課題に気付いている。 自分の学びの過程や解決のために活用した情報（資料）を再度見直し、そのよさや課題を見いだしている。
主体的な学び	<ul style="list-style-type: none"> 課題の解決に対する目的意識を明確にもっている。 困難な課題にも挑戦しようとしている。 ゴールをイメージしながら解決しようとしている。 課題の解決に向けた自分の思いや願いをもち、進んで解決しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えた方法で探究しようとしている。 一度得られた解決方法について、さらによい方法がないか、他の方法を試そうとしている。 困難な課題にも諦めずに取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 得られた解や学びの過程を自ら見つめ直そうとしている。 自らの学びに自信をもち、さらに学ぶ意欲を高めている。 自分の成長について気づき、さらにどのようになりたいか（したいか）について表現している。 新たに生じた疑問や課題について解決方法を考えようとしている。

2) 授業における教師の手立て



	問題の発見・解決のプロセス		
	見通し	探究	振り返り
深い学び	<ul style="list-style-type: none"> 各教科等の特質に迫る課題の設定（課題との出合わせ方） 解が1つでない課題の設定 困難性のある課題の設定 実社会や実生活で活用できる課題の設定 認識が揺さぶられる課題の設定（認識のずれを生み出す情報の提示等） 見通し（結果と解決方法）をもてる課題の設定 学習の方向性を共有する場の設定（予想や仮説を立てる） 	<ul style="list-style-type: none"> 試行錯誤の場の設定 複数の考えを比較・関連付ける場の設定 課題に立ち戻り、解決の方向性を確認する場の設定 共通体験に基づいて、解決方法を多面的・多角的に考える場の設定 他教科等の学びと関連付ける場の設定 授業のねらいや各教科等の特質に応じた思考の可視化（多様な表現方法による形成的な評価） 問いが連続する課題と授業展開（汎用性や一般化） 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の学びを自分の言葉（表現）でまとめる時間の保障→自己評価の場の設定 思考を揺さぶり、学びの過程を再考する場の設定 多様な解の中から、最適解を選択する場の設定 実社会や実生活、既習の学び、他教科等との関連を価値付け 学びを他の場面で活用したり、新たな疑問を生み出したりする情報提供や場の設定 新しい課題を見出した児童生徒への称賛と交流の場の設定
対話的な学び	<ul style="list-style-type: none"> 集団で解決する必然性のある課題の設定 解決方法が多様な課題の設定 考える視点を共有する場の設定（振り返りの視点に生かす助言） 予想に対する意見を話し合い、解決方法について吟味する場の設定 ルール（授業のあるべき姿）の共有化 交流のめあてをもったり、交流する意義を理解したりするような助言 	<ul style="list-style-type: none"> 目的に合った小集団の設定及び交流方法の活用 必要感のある交流の場の設定（時間とタイミング） 効果的な交流を行うための可視化の工夫（根拠のある交流の場） 共通体験の場の設定 「問い返し」のある応答をする交流への助言 支持的風土に支えられた活動の保障（聴き合う関係づくり） 課題の解決につながる情報提供 	<ul style="list-style-type: none"> ペアや少人数のグループで、学習成果や学びの過程を吟味する場の設定 他者との学び合いや多様な情報収集・精査によって課題が解決したことへの価値付け 多様な他者からの評価の場の設定（相互評価の場の設定） 学習成果を他者に伝え、質問や疑問を受ける場を設定することで、方策を再検討する時間の保障
主体的な学び	<ul style="list-style-type: none"> 目的意識や相手意識が明確な課題の設定 挑戦意欲や知的好奇心をかきたてる課題の設定 児童生徒の問題意識からの課題の設定 具体物や体験活動等を取り入れ、驚きや疑問等を生み出し、課題につなぐ場の設定 既習事項や前時までのつながりを意識する場の設定 自己選択や自己決定をする場の設定 	<ul style="list-style-type: none"> 一人で解決方法等を考える時間の確保 自己の考えを整理したり、構造化したりする場の設定 自分の考えた方法で探究する場の設定 児童生徒に委ねられる場の設定 自由に応答できる環境づくり 挑戦意欲をかき立てる助言 児童生徒が自ら情報収集できる環境づくり 児童生徒が思考したり、表現したりしたことへの評価 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の変容を自覚する場の設定や助言 児童生徒の学びの過程に対する価値付け 新しい課題への意欲の喚起 学んだことを生かし、自ら挑戦したくなる課題の提供 実社会や実生活とのつながりについて気付く資料等の提示（視野を広げる工夫） 振り返りの視点を共有し、互いのよさや課題に気付くような助言

※「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の三つの視点は、児童生徒の学びの過程としては一体として実現され、互いに影響されるものであるが、授業改善の視点としてそれぞれ固有の視点であることに留意する。

3) 三つの視点を「問題の発見・解決のプロセス」に位置付けた実践事例

平成28年度に実施した専門研修「アクティブ・ラーニングリーダー養成研修」において、受講者が作成した実践事例の一部を香川県教育センターWebサイトに下記の様式で掲載しています。

事例) 小学校

①目的意識の明確化

児童の姿

単元の始めに、実体験の場を設定したことで、興味や疑問が湧き起こり、明確な課題意識と見通しをもつことができた。

②③「問い返し」のある交流場面の設定

児童の姿

グループで話し合う際、相手の話を受容し、「問い返し」をしながら話を進めることで、考えが広がったり深まったりした。

事例) 高等学校

④見通しをもつための状況づくり

生徒の姿

解決に必要なデータや自分の考えを事前にもっておくことで、解決の見通しをもつことができた。

⑤⑥質疑応答の時間により、自己の考えを深める場の設定

生徒の姿

自分の気付かなかった問題等について質問を受けることで、考えを整理したり、新たな課題が生まれたりした。

注意*高松市立牟礼小学校の平成27年度の実践をもとに香川県教育センターが作成しています

小学校 第3学年国語科での実践事例
単元名「はたらく犬について調べよう」

アクティブラーニングの視点からの工夫

① 学習したことや調べたことを全校生や保護者に伝えるためにリーフレットをつくるという課題を見直しを設定し、目的意識をもって主体的に学習できるようにした。

② 課題を解決するためにグループや全体での話し合いの場面で、相手の考えに対して「比べて」「例えば」「でもね」等の言葉を使いながら問い返し活動を繰り返すことにより、自分の考えが深められるようにした。

1 学習指導過程 (本時 8 / 13)

○本時の目標
「盲導犬にふさわしい心構えは？」の問いに対する答えを考え、要約して書くことができる。

学習活動	指導上、留意した点
1 前時までを振り返り、本日のめあてをもつ。	①ゲストティーチャーからのメッセージ動画を視聴する場を設定し、単元の目的を確認したり、意欲を喚起したりする。
2 中心となる文や言葉を見付け、要約する。 (1) 自分で考える。 (2) グループで考える。 (3) 全体で話し合う。	① 書き込みができる黒板カードを用意し、児童の発言を黒板で操作できるようにする。 ② 前の発言者との関わりで話すよう助言する。 ③ 黒板カードを操作しながら、大事な言葉や文につながる発言を称賛することで、児童の多様な発言をコーディネートする。
3 リーフレットに書き加え、本時の振り返りをし、次時への課題をもつ。	① 要約した文章を友達と読み比べることで、本時の学びを振り返られるようにする。

「期待する児童の姿(まとめのことば)」
言葉が滑ったり、書き換えたりするとすっきりと要約できた。リーフレットに書き加えたい。

2 実践後の成果と課題 (授業での児童の反応や姿から)

○単元の始めに、盲導犬と視覚障害のあるゲストティーチャーを実際にお招きし、その交流から湧き起こる興味や疑問を大切にしながら、課題を設定したことで、毎時間の学習の目的意識が明確になった。
○児童の主体性を生かせるように、自由に発言できる話し合いを繰り返す場面で、話し手の心や言いたいことを改めて聞く児童の姿が見られた。また、深い学びにつながる自然な発言が出る児童が増えてきた。

3 本実践での課題

■次の時間へのつながりが弱くなる児童もあり、振り返り場面において思考を深める工夫が必要であった。

■自分の考えがより深まったという実感をより味わえる話し合いの場になるように、話し合いの必要性を高めたり、一人一人の考えが表出され、更に互いの考えを聞きながら自分の考えとつながりやすくなるような工夫をしていきたい。

注意*香川県教育センターが作成しています

高等学校 第1学年公民科(現代社会)での実践事例
単元名「現代政治の特質と課題」

アクティブ・ラーニングの視点からの工夫

④ 改善策を考えるために、必要なデータを事前にもとめさせておくことで、本時の課題とその解決の見通しを持たせる。

⑤ 生徒一人一人が改善策を考えられる時間を確保すると共に、グループで多様な意見を出し合いながら、改善策のアイデアを構造化するなど協働して課題の解決に取り組ませる。

○グループでまとめた考えを全体に発表し、質疑応答を行うことで検証させる。

1 学習指導過程 (本時 4 / 4)

○本時の目標
我が国の選挙制度の仕組みを理解した上で、若者の政治的無関心や低い投票率の現状に触れながら、政治参加の重要性と民主社会における自らの生き方について考えを深めさせる。

学習活動	指導上、留意した点
1 前時の内容(全般的な投票率と年代別投票率の推移)の資料などから、本時の課題を確認する。	① 年代別投票率の資料から若者が投票に行かない理由の特徴を読み取り、まとめることで、本時の目標を意識させる。
2 若い世代の投票率低下を改善する方法を考察、協議する。 (1) 自分の考えを付箋紙に書き出す。 (2) 各自が書き出したことを基にグループで協議する。 (3) グループの意見を全体に発表する。 (4) 発表するグループ以外から質問をする。	① 自由にアイデアを出し合うことができるようにブレインストーミングの手法を用いる。 ② 多様な意見を出し合い、整理できるように構造化紙を使って分類させる。 ③ 自他の考えを比較・吟味・関連付けし、新しい意見を出していくことを推奨する。 ④ 他のグループの発表への質問を通して、改善策の一層の構造化を促す。
3 本時のまとめをする。	① 若者の投票率の低下を改善するために、その原因、改善方法、改善のために必要な知識や行動についてワークシートにまとめる。

「期待する生徒の姿(まとめのことば)」
政治や政治家は、国民が直面する政治的問題を見出し、新たな対立軸を示すことで政治への関心を高めるようにすると共に、少子高齢化が進む中、投票率の低下によって生じる弊害を未然に防ぐためにも、若い世代の有権者としての自覚を育むことが大切である。

2 実践後の成果と課題 (授業での生徒の反応や姿から)

○学習課題について「個人→グループ→全体→個人」というサイクルを通して学び合うことに慣れている。特にグループワークにおいては、自身の取り組みを課題やグループ内で果たすべき役割を自覚できる生徒が増えている。

○グループでの協働的な活動では、既習知識(本時は、政党政治と選挙制度、民主政治における政党や利益集団の意義と役割、世論の意義など)を踏まえ、多様な意見を構造化して考察しようとする様子が見られるようになった。

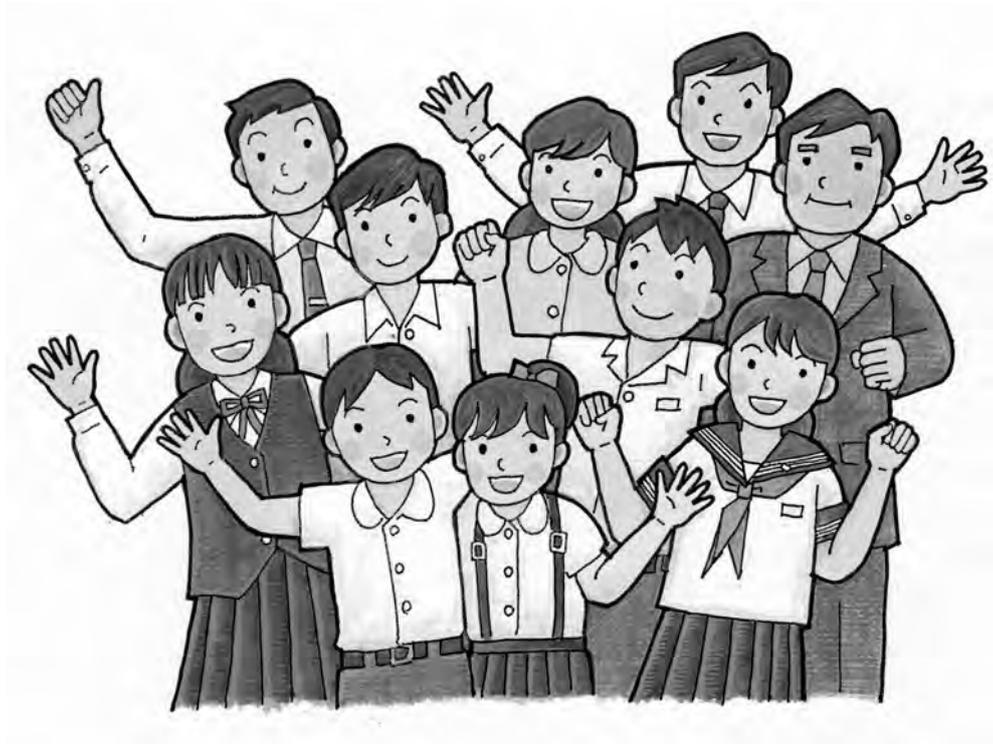
3 本実践での課題

■まとめることばを、自己評価(主体的な活動)するとともに、相互評価(協働的な活動)をすることで、能動的に学習する力や決断の権力が付いたかどうかを検証する機会を取り入れる工夫をしていきたい。

授業づくりでは、授業の終末場面の「期待する児童生徒のまとめのことば」に向け、「問題の発見・解決のプロセス」の中での教師の手立てが有効であったのかどうかを、児童生徒の反応や姿から、具体的に分析することが次の授業の改善のポイントになります。

第4章

授業改善は誰がするの？



全員参加の学校づくり・授業づくり！

1 全員参加の学校づくり・授業づくり

学校の教育目標の実現は、たった一人の教師の力だけでできるものではありません。教師一人ひとりがアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に取り組むことは、教育課程の在り方の改善にもつながります。学校内の役割や経験年数の違う全教職員の視点、児童生徒や保護者、地域の方々など、様々な立場からの視点を活用し、アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントを連動させていきましょう。

1) アクティブ・ラーニングと連動させたカリキュラム・マネジメント

① カリキュラム・マネジメントとは？

各学校では、どのような教育目標を設定していますか。おそらく児童生徒や地域の実状等を踏まえて、学校の教育目標が設定されていることでしょう。

そのような学校の教育目標を実現するためには、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していく「カリキュラム・マネジメント」の充実が重要です。これまでも、PDCAサイクル（計画—実施—評価—改善）の視点から、教育課程を不断に見直すことが重視されてきましたが、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）において、これからの「カリキュラム・マネジメント」については、次の三つの側面から取り組むことが求められています。

教科等横断的な視点	PDCAサイクルの確立	教育資源の活用
学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。	教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。	教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

Q&A



「答申」では、教科等横断的な視点に立って、教科等間のつながりを捉えた学習を進めることが求められているようですが、どうしてですか？



教科単独では生みだし得ない教育効果をもたらすからです。児童生徒に必要な資質・能力を育むためには、各教科等や各学年で扱う内容を視野に置きながら、関連を図ったり、柔軟に組み合わせたりすることが必要になります。

5-1 教科等横断的な視点（例）

国語科で学んだ新聞づくりを社会科のスーパーマーケット見学のまとめに生かそう！

理科で環境問題に関わる教材がある。校内の先生方に、関連教材などを聞いて、学習時期を考えよう。

② アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が学校文化の醸成と連動する！

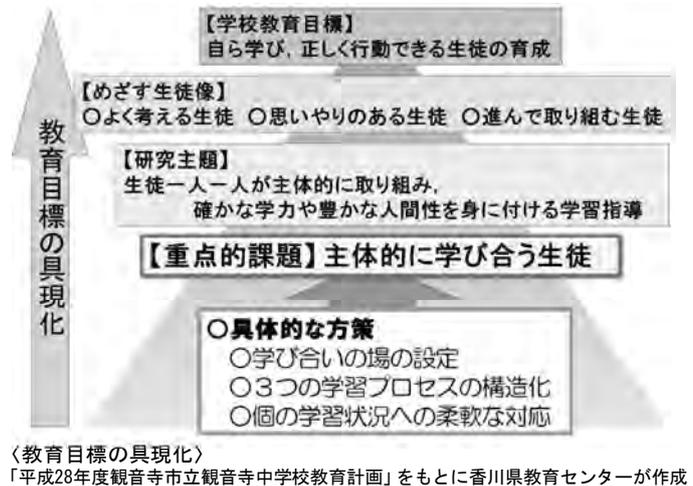
アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善は、一単位時間だけでなく、単元や題材のまとまり、年間の指導計画から考える必要があります。さらに、教科等横断的な視点からの授業改善を全教職員で取り組むことは、カリキュラム・マネジメントにおける組織運営の改善にもつながっていくといえます。

教科等横断的な視点

各学校では、学校の教育目標をもとに「めざす児童生徒像」が具体化され、さらには校内研究の主題が設定されます。

ここで大切なのは、「具体的な方策」として「何を」「どのようにするか」について明確にするとともに、全教職員で共有していくことが大切です。

例えば、観音寺市立観音寺中学校では、「どの授業でも」を合言葉に、教科等横断的な視点から授業改善に取り組んでいます。



【校内研究を中心に教科等横断的な視点を教職員間で共有していく工夫】

事例) 観音寺市立観音寺中学校

○学力向上・研究推進委員会の設置（研究推進に関する検討・授業の事前検討会等）

○校内研修の工夫ポイント

- ・視点生徒（重点的に観察し記録を取る生徒）の分析
- ・参観場面の重点化により、授業後のグループ別協議の話し合いの焦点化と効率化

【研修日程（50分間）】

- ① 校長先生からの話
- ② 授業説明（5分）
※教師の手立てを中心に
- ③ 視点生徒の変容説明（5分）
- ④ グループ別討議（20分）

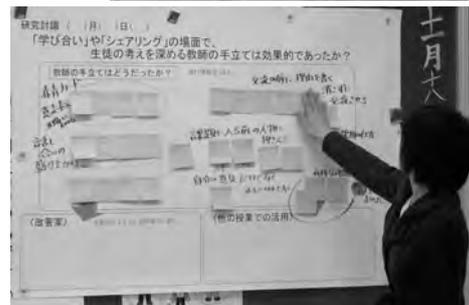
日常の授業につながる

【参観した場面別】

- | |
|---------------------------------|
| ①課題設定の場面
(意欲を高める教師の手立て) |
| ②学び合いの場面
(学び合いを高める教師の手立て) |
| ③シェアリングの場面
(実感を表面化させる教師の手立て) |

※重点的に参観する場面は毎回変える。

- ⑤ 各グループ討議の発表（10分）
- ⑥ 指導・助言（10分）



教科等横断的な視点からの授業改善を進めていくためには、ワークショップ型校内研修等を通して、教師一人ひとりが自分の言葉で意見を出し合ったり、他者の多様な意見を聞いたりするなど、授業の在り方を自由に議論する文化を校内に生み出すことがポイントです。このような取組によって、その学校の一員としての自覚を深め、共に児童生徒を育て、学校を創る教職員集団としての意識も高められるのではないのでしょうか。

【教師が課題を共有し、自由に議論する文化の土台をつくるための工夫】

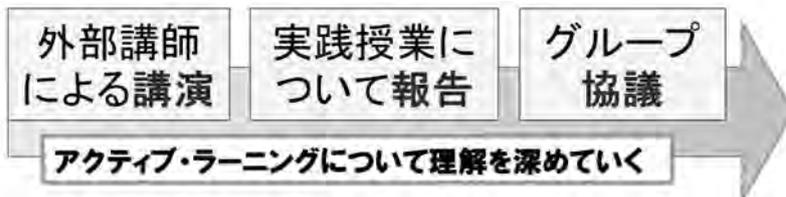
事例) 香川県立高松北高等学校

○アクティブ・ラーニング研究会の設置 (校長・教頭・教務主任・教科代表)

- ・授業時間内に定期的な公開授業を実施する。(誰もが参観できる環境づくり)
※授業参観中に気付いたことを付箋に記入し、授業研究の際に共有できるようにする。
- ・「研究会たより」を発行し、研究内容について職員会議で報告し共有する。

○アクティブ・ラーニングについて理解を深める場の設定

※他校の教員も交えた「公開講座」の実施



PDCAサイクルの確立

児童生徒の現状を把握するためには、児童生徒の様子とともに、アンケート調査等が活用されます。アンケート調査は、PDCAサイクル (計画—実施—評価—改善) において、改善にどのように生かしていくかが大切です。特に、計画を立てることを目的とせず、「C→A→P」のサイクルに連続性をもたせ、確実に実践につなげていくことが必要です。

【生徒へのアンケート調査の結果を授業改善のポイントに生かす工夫】

事例) 観音寺市立観音寺中学校

○生徒の思いから、「学び合い」を成立させる3つのポイントを分析し、改善に生かす。



教育資源の活用

学校の教育目標の実現のためには、「どのような教育活動が必要か」、そして、「そのためにどのような教育資源が必要か」の両側面を効果的に組み合わせ、組織的に活用していくことがポイントです。

Q&A



教育資源とは、どのようなものですか？



教育資源とは、人、物、予算、組織などの条件整備を指します。

- 人的な資源・・・人の配置と育成
(校内外の教職員や専門家、保護者、地域の方々等)
- 物的な資源・・・施設、設備、情報
(ICT環境、図書館、自然環境、近隣施設等)
- 財政的な資源・・・財源、予算
- 潜在的な資源・・・組織と運営、時間、学校や地域の文化

【教育活動と教室環境を連動させた工夫】

事例) 高松市立協和中学校

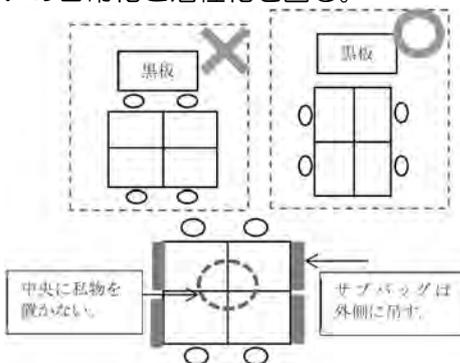
○教室環境マップや学び合い応援マニュアルを作成し、全教室の環境を整える。

○ボードを各教室に常設し、学び合いの日常化と活性化を図る。

「学び合い応援マニュアル」より

☆グループ学習をする時の留意点

- ① 黒板に対して背を向けて座る生徒がないように、黒板に対して横向きに机を合わせる。
- ② 机と机の間にすき間ができないように、ぴったり付ける。
その際、合わせた中央部は4人で考えるための共有スペースとするため、そこに筆箱や教科書類を置かないように指示する。
- ③ 5人班は作らない。3人班はOK。



【教育活動と地域の人や施設を関連付けた工夫】

事例) 高松市立十河小学校

○地域のお店をよりよくするために、総合的な学習の時間に自分たちの思いや願いを出し合い、お店の人に伝え実現させる。



事例) 高松市立牟礼小学校

○生活科において、野菜づくりの疑問を解決するために、地域の野菜づくり名人の方に継続的に教えてもらう。



2) 児童生徒と教師が共に学校を創る

① 児童生徒の主体的な取組を促す授業を土台に

学習の主体は児童生徒です。児童生徒が自らの学びをよりよいものにしようと目標をもち、学習環境等を改善しようとする取り組みが、各学校の教育目標の実現につながります。そのためには、児童生徒の主体的な取組をどのように促していくかが大切です。

Leaf
5-3

学習者主体の授業は、参画意識へつながる！

アクティブ・ラーニングによる授業では、児童生徒が自らの願いをもち、ゴール像を描きながら、それを実現しようとする能動的に取り組む姿が期待できます。このような学びの経験は、自分を取り巻く実社会や実生活での問題に気づき、解決しようとする意識をもたせるだけでなく、**自分たちの力で解決できるという自信と自覚、学校や社会に参画する意識**につながります。

② 児童生徒が関わる学級・学校づくり

「先生、これやってみたい」「こうすると、もっとよくなると思う」と児童生徒からの思いや願いが出たときが、チャンスです。共に学びをつくる存在として児童生徒の力を信じ、学級や学校づくりに積極的に関与する場を設定したり、教師も共に取り組んだりするなど、学級や学校づくりをしていくことが重要です。

【めざす児童生徒像が、児童生徒から提案される】

事例) 綾川町立綾上小学校

○児童会を通して、学びに向かうよりよい姿が学校全体で共有されていく。



事例) 高松市立協和中学校

○各学級の思いを集めた生徒会「スローガン」は全校生でめざす生徒像となる。

生徒自身が決めた月目標	
H 27	9月 生活リズムを整えて、授業に集中しよう
	10月 奏でよう なかまとともに 協和音
	11月 気配り 思いやり なかまづくり
	12月 規則正しい生活をして1年をしめくろそう
	1月 一人一人目標を立て、成功への一歩をふみだそう
	2月 万全の状態テストに挑もう
	3月 次の学年に向けて1年のまとめをしよう
H 28	4月 気持ちを切り替え新学年の自覚を持とう！
	5月 協和中生全員で運動会を成功させよう
	6月 6月の三大大事に積極的に取り組もう
	7月 新学期に向けて勉強と部活を両立しよう

【生徒による授業評価が、授業改善に直接つながる】

事例) 香川県立丸亀高等学校

○総合的な学習の時間についてのアンケート調査を実施し、生徒の思いや願いを把握することによって、授業づくりに直接生かされる。

総合学習(TP) 授業評価個票 H28年7月実施

3年 組 理系

授業科目名 総合学習 科目コード 19

総合的な学習の時間(テーマプロジェクト)では、科学技術の進歩に伴い、現代社会が抱えている諸問題を考えるために、教科横断的に学んでいます。TPでは、教員からの誘導だけでなく、発表・プレゼンテーション・ディスカッションレポート作成なども実施されます。

国語科が相当するTPについて

質問 1 国語(現代文・古典)の授業と比べて、発展的な内容や難解な、または、発表やディスカッションなどの活動の場が多い。 (1) 当てはまる (2) やや当てはまる (3) 当てはまらない

質問 2 相手に自分の考えを伝えるための表現力や、物事を論理的に説明することができる。 (1) 当てはまる (2) やや当てはまる (3) 当てはまらない

理科が相当するTPについて

質問 3 理科(化学・物理・生物)の授業と比べて、発展的な内容や教科横断的な内容の学習が多い。または、発表やディスカッションなどの活動の場が多い。 (1) 当てはまる (2) やや当てはまる (3) 当てはまらない

質問 4 科学的な視点で論理的に考えるための能力や、創造的な感性などを磨くことができる。 (1) 当てはまる (2) やや当てはまる (3) 当てはまらない

【児童生徒の提案が日常的な活動になり、学級や学校文化がつけられる】

事例) 観音寺市立観音寺中学校

○授業で育まれた主体的に学びに向かう態度が生徒発の活動を生み、生徒が進んで活躍する場の充実が学校文化を一層醸成する。



＜校歌うたい隊＞



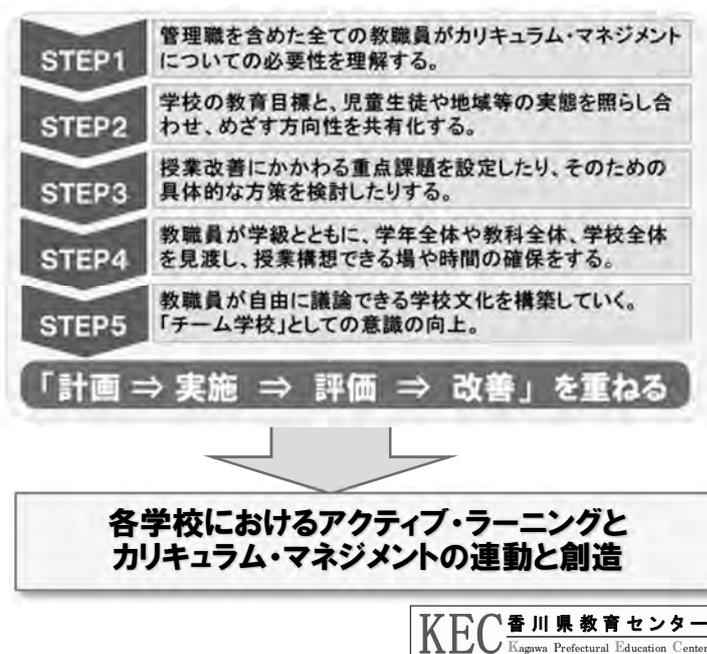
＜あいさつボランティア＞



＜もくもくボランティア＞

3) 授業改善を全教職員で進めていくために

学校の教育目標の実現に向けて、アクティブ・ラーニングの視点から授業改善を進めていくためには、カリキュラム・マネジメントとの連動が不可欠です。そして、下図に示した過程を何度も積み重ね、特色ある各校の取組を創造していくことが大切です。



学校がめざす方向性等を共通理解し、教職員による不断の授業改善とともに、学校全体が「チーム」で取り組む校内研修等を通じた研究を重ねていくことで、教職員一人ひとりがそれぞれの立場から自校のカリキュラムを自らマネジメントする意識を醸成していきましょう。

また、家庭や地域と、児童生徒にどのような資質・能力を育むのかという目標を共有し、各学校の特色を示していくことで、学校の教育目標の実現に向かうといえます。

【教職員間で共通した意識をもつための「合言葉」】

事例) 高松市立牟礼小学校

○アクティブ教師3つの心構え

- 「1つ、全てを喋るべからず」
- 「1つ、正解にすぐ飛びつくべからず」
- 「1つ、必要性のないグループ活動を行うべからず」

事例) 坂出市立坂出小学校

○そろえるプロジェクト

- ～学習面・生徒指導面・清掃面～
- 「すべての児童をすべての教職員で育てる！」

事例) 観音寺市立観音寺中学校

○できることから始めよう! (合言葉)

- ・全ての教員が
- ・どの授業でも
- ・5分の学び合いでよい
- ・できる工夫から

事例) 高松市立協和中学校

○同僚性の象徴 [共通の心構え]

- 協和の3つの『ず』
- ・あきらめず
- ・見放さず
- ・期待しすぎず

2 授業改善のためのチェックポイント

アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に取り組むために、第2章で示した「授業づくりの5つのポイント」から改善のためのポイントを考えていきましょう。

	項目	Hop	Step	Jump	Excellent
授業前及び授業中	Point 1 課題を明確にした授業展開の計画	取り組むべき課題が曖昧である。 ★課題の明確化 ★児童生徒の実態に基づく課題の検討	児童生徒の実態からの取り組むべき課題が設定されている。 ★主体的・協働的な視点から課題の検討 ★必要感のある課題の設定	課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの視点から、取り組むべき課題が設定されている。 ★課題の焦点化 ★児童生徒が見通し（結果や解決方法）をもつ場面の設定	単元や題材のまとまりの中で、目的意識が明確であり、見通しをもつことのできる課題が設定されている。
	Point 2 授業のあるべき姿を児童生徒と共有	授業のあるべき姿が児童生徒の中にあるときとないときがある。 ★授業のあるべき姿の具体化 ★常に活用が可能なもの	毎時間の授業のあるべき姿について児童生徒は知っており、守っている。 ★教師からの提示だけでなく、児童生徒があるべき姿への理解を図る場の設定	授業のあるべき姿の必要感を児童生徒が認識し、互いに聞き合ったり教え合ったりする関係性がある。 ★授業のあるべき姿の価値の実感 ★児童生徒自身があるべき姿を更新・創造する場の保障	授業のあるべき姿の価値を児童生徒が実感し、仲間と共に安心・安全な場をつくり出している。
授業中	Point 3 児童生徒の発言の受容	教師の説明のみに限り、児童生徒が発言をする機会がない。 ★児童生徒が思考したり表現したりする時間の設定 ★自分の考えをもつ時間の保障	発言する機会はあるが、毎回、決まった児童生徒の発言が取り上げられる。 ★教師にとって都合のよい発言ではなく、多様な発言を引き出し取り上げる授業展開	どの児童生徒の発言も受け止められるため、多様な発言が引き出されている。 ★間違いが生かされる授業展開 ★受容的な「問い返し」のある交流の場の設定	どの児童生徒の発言に対して価値を見だし認め、多様な発言が授業の展開に生かされている。
	Point 4 問題解決場面の設定	解決に向けて情報を収集したり、対話を通して思考したりする場面がない。 ★解決に向けた見通しをもつ場の設定 ★試行錯誤したり、情報を整理したりできる状況づくり	見通しをもち、解決に向けた必要な情報を集めたり、互いの考えを出し合ったりする場がある。 ★児童生徒の発表だけや必要のない教師の介入からの脱却 ★解決に向けて対話の必要感がある課題や場の設定	解決に向けて複数の情報を精査・関連付けしたり、対話を通して思考したり表現したりする場がある。 ★思考の可視化により、多様な考えを比較・関連付けする場の設定 ★教科等横断的な視点や単元や題材のまとまりを意識した授業展開の工夫	考えの根拠をもち、他者との対話を通して多様な情報や考えを吟味・統合したり、既習の学びや経験、実社会や実生活とつなぎながら、知識を相互に関連付けてよりよい解決策を考えたりする場がある。
授業後	Point 5-1 児童生徒による振り返り場面の設定	教師が学習のまとめを行う。 ★児童生徒とともに学習を振り返る場の設定	児童生徒の言葉が反映された学習のまとめや振り返りがある。 ★児童生徒が自分の言葉で振り返る時間の保障 ★学びの過程を振り返り、その成果や課題が実感できる評価の場や助言	児童生徒自身が自分の言葉でその時間に学んだことを表現するなど、学習の成果を実感する時間が保障されている。 ★学んだことを活用する場の設定 ★新たな疑問をもつことができる情報の提供や場の設定	児童生徒が自分の言葉でその時間の学びを表現することで、自他の成長を実感したり、学んだことが他の場面で活用できることを理解したりするなどの場が保障されている。次の学びに向かうきっかけとなる疑問や課題が生まれる場がある。
	Point 5-2 次の学びに向かう児童生徒の姿への理解	本時で学習が完了する。 ★児童生徒の多様な姿を捉えようとする姿勢をもつ	児童生徒から生まれた疑問に気づき、支援する。 ★児童生徒の学んだ足跡を積極的に評価する ★教師も学びを振り返り、授業改善の視点をもつ	児童生徒の多様な疑問や新たな取組を促す手立てがある。 ★単元や題材のまとまりでの学びを想定するとともに、教科横断的な視点から児童生徒の学びを捉える	児童生徒の疑問や新たな取組を促し、次の授業や他の場面に生かすとともに、個々の児童生徒の学びの成果を学級全体の成果として広げ深めている。

※ 上記の表は、「Excellent」に向けての授業づくりの視点を得るためのものです。

※ 「★」は、次のステップに向かうための視点例を示しています。

※ 各学校の児童生徒の実態に応じて、授業づくりをしましょう。

資料

○ 「アクティブ・ラーニング ノ ススメ in かがわ」 Leaf.1～6

※なお、Leaf.1～6は、香川県教育センターWebサイトに参考資料とともに掲載しています。

Leaf. 1

アクティブ・ラーニングノススメ in かがわ

アクティブ・ラーニングで 授業を変えよう！

- 1 アクティブ・ラーニングって…なに？
- 2 なぜ、アクティブ・ラーニングなの？
- 3 授業をどのように変えればいいのか？



KEC 香川県教育センター
Kagawa Prefectural Education Center

Q1 アクティブ・ラーニングって…なに？



A1 自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協動的に学ぶ学習のことです。

PISAなどの国際調査によると、日本は学習意欲や自己肯定感が低く、香川県は全国学力・学習状況調査におけるこの項目で、全国の中で低い結果となっています。そのため、主体的・協動的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）の充実が必要です。

◆Q1-1 講義形式の知識伝達型の方が、知識・技能が身に付くのではないですか？

知識・技能を一方的に伝達しただけでは、身に付いたとは言えません。確かな学力とするためには、知識・技能を活用して定着させたり、体験を通して知識を身に付けたりするなどの工夫が必要です。そのためには、アクティブ・ラーニングが効果的です。

◆Q1-2 アクティブ・ラーニングは、どんな効果があるのですか？

主体的・協動的に学ぶ学習やそのための指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また、子どもたちの学習意欲を高める上でも効果的であることが、これまでの実践の成果からも指摘されています。
教員ではなく、児童生徒が中心になって言語活動や体験的な学習を行う授業への転換によって、より一層の効果が期待できます。



◆Q1-3 どんな学習を目指していけばいいのですか？

ある事柄を知っているだけでなく、実社会や実生活の中で知識・技能を活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協動的に探究し、成果等を表現していく学習が求められています。

Leaf. 2

アクティブ・ラーニングノススメ in かがわ

アクティブ・ラーニングで 学習意欲を高めよう！

- 1 能動的な学習に向かう課題づくり！
- 2 学び合いで意欲が高まる！ 自信ができる！
- 3 教師に求められる集団づくりと授業づくり！



KEC 香川県教育センター
Kagawa Prefectural Education Center

1 能動的な学習に向かう課題づくり！



児童生徒の学習意欲には、単元や本時の課題設定が大きくなります。児童生徒の内面を理解しながら、能動的な学習に向かう課題を設定していくことが大切です。

学習する児童生徒の具体的な学びの姿を考える

児童生徒は、もともと「知りたい、できるようになりたい」という気持ちをもって、その気持ちをより高めるために教師は、児童生徒の視点に立ち、「自分のこだわりを追究する」「課題の解決のために友達と考えを練り合う」など、具体的な学びの姿を考えることが大切です。
そして、児童生徒が人や社会、自然とのかかわりの中で「なぜ？ もっと知りたい」「みんなで解決したい。友達はどう考えているの？」と積極的に学びたいとする課題を、児童生徒の言葉を生かしながら設定していきます。



【奉礼小学校様】

能動的な学習に向かう課題を設定するための2つの要件！！

○主体的な学習

深く考え、自ら解決したくなる課題

課題との出合わせ方を工夫し、解決に向けた多様な見方・考え方が生まれる課題を設定することで、深く考えようとする意欲が高まります。

○協動的な学習

集団で解決する必要がある課題

他者に相談したくなる課題、他者との学び合いによって解決できそうな課題を設定することで、協動的に解決していく必要性が生じます。

例【中学校 第2学年 数学科「確率」】

自他の考えを聞き合いたくなる課題

くじに当たりやすさはあるのかな？

【主体的】
後から引いた方が当たるような気がするよ！でも、くじは公平でなければいけないよね？

【協動的】
実験にみんなで確かめてみよう。くじが公平である理由を友達はどうに考えているのかな？

例【小学校 第5学年 理科「魚のたんじょう」】

体験を通してみんなの願いを解決したくなる課題

みんなで学校のメダカを増やしたい！

【主体的】
メダカを増やすには、きつと誰と誰が必要だよ。種と産の体にはどんな違いがあるのかな？

【協動的】
メダカのすみかをみんなで一緒に作ろう。どんな環境が大切なのか、グループで調べよう。

例【高等学校 公民科（現代社会）「共に生きる社会を目指して」】

持続可能な社会の形成に貢献したくなる課題

国内外のごみ問題に対して

私たちはどんな対応をすればいいの？

【主体的】
ごみ処理の方法や予算は、国や住んでいる地域によって違う！どうして違うのだろうか？

【協動的】
みんなの認識として、国内外の取組について調べたり話し合ったりしたことをまとめて、町の担当課に提案しよう！

Q2 なぜ、アクティブ・ラーニングなの？



A2 「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要だからです。

中教審指問^{※1}では、次の3つのことが必要とされており、学習指導要領には、内容だけでなく方法や評価について示されています。

- ① 「何を教えるか」という知識の質や量の改善
- ② 「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視
- ③ 「どのような力が身に付いたか」に関する学習評価の在り方

◆Q2-1 学びの質や深まりを重視することで、子どもたちにはどのような力が育まれるのですか？

新しい時代を生きていく上で必要な資質・能力です。変化の激しい社会を生きていくためには、何事にも主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、思いやりなどの豊かな人間性を身に付けることが求められています。

◆Q2-2 そのような力を子どもたちに身に付けさせるために、どのような教育改革が進められているのですか？



「高大接続」改革^{※2}があげられます。教育改革における最大の課題でありながら実現が困難であった「高大接続」改革を現実のものにするための方策として、現在、高等学校教育、大学教育及びそれらを接続する大学入学者選抜の一体的改革が進められています。

◆Q2-3 「高大接続」改革と小・中学校教育とは、関わりがあるのですか？

大きく関わっています。これからの教育においては、初等中等教育から高等教育を通じて、「生きる力」「確かな学力」を子どもたちに確実に育成することが求められています。小・中学校段階における取組が高等学校や大学段階へと生かされるよう、小・中学校教育においても、より一層、学びの質や深まりを重視することが必要となります。

※1 中央教育審議会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（原案）」（平成26年11月20日）
※2 中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての教育の質や目標を再検証し、未来に花開かせるために～（概要）」（平成26年12月22日）

Q3 授業をどのように変えればいいのか？



A3 学習の主体を、教師から児童生徒に転換していくことです。

国内外の学力調査では、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることに課題があることや、自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識等が国際的に見て低いことなどが指摘されており、子どもの自信を育み能力を引き出すことが求められています。

◆Q3-1 学習の主体が児童生徒になる授業とは、どんな授業ですか？

児童生徒が自ら課題をもち、仲間とともに考えを練りあったり創り上げたりする授業といえます。
例えば、現行の学習指導要領でも大切にされている言語活動を充実させた授業や、体験的な学習を取り入れた授業のことです。

◆Q3-2 「アクティブ」という言葉を、どう捉えればよいですか？

ここでいう「アクティブ」とは、単に活動的になるのではなく、「能動的」に学ぶということです。したがって、児童生徒が課題の発見・解決に向けて、仲間と考えたり判断したりしていくために、教師の話や「能動的」に関わる場面も、活動的には見えますが「アクティブ」と言えるでしょう。

◆Q3-3 アクティブ・ラーニングによる授業をするときに、気を付けたいことはありますか？

身に付けさせたい力を明確にし、学習場面に応じた適切な指導の下、児童生徒が能動的に学ぶことが大切です。また、アクティブ・ラーニングという手段が目的化したり、特定の型とおりの指導で形骸化したりしないようにするといえます。

アクティブ・ラーニングの参考資料を香川県教育センターWebサイトに掲載してありますのでご覧ください。また、研究についてのご相談等がありましたら、香川県教育センター 教育研究課までご連絡ください。

〒761-8031 香川県高松市堀東町1567-1
TEL 087-813-0931 FAX 087-881-3270
http://www.kagawa-edu.jp/edu/itdocs/



平成27年6月

2 学び合いで意欲が高まる！自信ができる！

講義形式の一言授業から、児童生徒が主体となり協働する授業へ。授業の質的転換を図るには小集団での学びと学び合う環境づくりは欠かせないものです。交流方法の工夫で、児童生徒の学習意欲をさらに高めたり、考えを確実にもたせたりすることができます。

目的に応じた小集団設定が協働的な学びをつくる

ペアやグループ学習は、それぞれに特性があり、期待される効果も違います。学習内容、学習場面に照らし合わせて、適切な学習集団を設定し、児童生徒の学びに深まりや広がり期待でき、協働的なものになるよう工夫しましょう。

【ペア学習】

ここ、いいね。ほくも〇〇さんのようにやってみよう。もっとよくなりそうだ。

能動的な視点
主体的 全ての児童生徒が参加できます。
協働的 気軽に話し合えます。

【グループ学習】

どうやった？ あ、それいい！でも、なんか違うよね…？

能動的な視点
主体的 3人以上のグループで考えをつくり、自信が持てます。
協働的 多様な意見を比較・統合し、考えが高まります。

一人で分かりかけてきたら、ペアやグループで考えをつくる！

ペアやグループのとき、一人ひとりしっかりと考えた考えを必ずもたなければなりません。一人で少し考えてみたあと、「ペアやグループで考えをつくる」という方法もあります。分かりかけていることを友達に話しかけ、いっしょに考えることで、安心感をもって交流できます。そのような話し合いの中で、自分だけでは解決が難しい児童生徒も多様な見方・考え方にふれ、内容を理解したりお互いに認め合ったりすることができます。

学び合いを活性化させるフロアデザイン！

児童生徒が授業の主体になるときは、机の配置を工夫することで学び合いを活性化させることもできます。

顔が見える、ノートが見えるように、例えば、全体であればコの字型に、グループは向かい合わせに…など、授業展開に合わせて机の配置をアレンジすると、活動モードにチェンジできます。



※アクティブ・ラーニング研究推進モデル校（平成27年度）：高松市立協和中学校、観音寺市立観音寺中学校、高松市立栗礼小学校、坂出市立坂出小学校

3 教師に求められる集団づくりと授業づくり！

教師には、学級経営としての「学びに向かう集団づくり」と学習指導としての「意欲的に取り組む授業づくり」の2つの視点から相互の関連を図った取組が求められます。

学級経営の視点：学びに向かう集団づくり

教師は、日頃から児童生徒に、仲間のもつ様々な意見を大切にしようとする意識や一面的な見方で他者を評価しない態度を育てることを積み重ね、支持的風土のある学習の場をつくりましょう。
アクティブ・ラーニングが機能すれば、学習の場は、児童生徒一人ひとりが自分の存在感をもち、共感的な人間関係を育む「心の言葉所」となるとでしょう。

学習指導の視点：授業づくりの5つのポイント

教師には、必要な知識や技能を教授するとともに、児童生徒に発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど、児童生徒が能動的に学習に参加できるように指導方法等を工夫した授業づくりが求められています。そのために教師は、次のことに留意しましょう。

- 1 児童生徒が取り組むべき課題を明確にした授業展開を計画する
課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの視点から計画する。その際は、「どのように学ぶか」を重視することも大切にする。
- 2 授業規律など、授業のあるべき姿を児童生徒と共有する
児童生徒が聞き合った、教え合ったことができる時間を確保するとともに、授業のあるべき姿として規律・ルールを共有することで、授業に参加することへの安心感をもたせる。
【例】聞くことは大切、聞かなくては進んで応じなさい】
- 3 児童生徒の発言を大切に受け止め、学習活動の中に位置付ける
児童生徒の発言に価値を見だし、認める。間違っても大丈夫といった安心感をもたせる助言を行ったり、発言を積極的に授業の展開に生かしたりする。
- 4 児童生徒の多様な意見を認め、課題に対して協働的な解決を導く
他者の意見を傾聴したり、客観的に判断したりすることを通して、自身の意見を修正したり、新しい意見を導き出したりすることを体験することで、学習活動中の自己有用感をもたせる。
- 5 全ての児童生徒に学びの過程やその成果を振り返らせる
児童生徒が発言や表現物を使ってまとめるなど、振り返りの記述や事後テストなどの機会を設定し、学習の成果を実感させるとともに、次時の学習課題に気付かせる。

アクティブ・ラーニングの参考資料を香川県教育センターWebサイトに掲載してありますのでご覧ください。また、研究についてのご相談等がありましたら、香川県教育センター 教育研究課までご連絡ください。

〒761-8031 香川県高松市堀東町1567-1
TEL 087-813-0931 FAX 087-881-3270
http://www.kagawa-edu.jp/edu/itdocs/



平成27年10月

アクティブ・ラーニングノススメ in かがわ

アクティブ・ラーニングで 教師・学校・社会をつなごう！

- 1 学校と社会を“学び”でつなごう！
- 2 各学校種間で学び方をつなげよう！
- 3 教師もアクティブ・ラーニングでつながろう！



KEC 香川県教育センター
Kagawa Prefectural Education Center

1 学校と社会を“学び”でつなごう！

児童生徒が自らの生涯を生き抜く力を培っていくためにも、学校を変化する社会の中に位置付け、“学び”の在り方をアクティブ・ラーニングの視点から共有し、学校種間、学校間で連携・接続していくことが大切です。

学校は社会の一部として機能する～学校と社会の接続～

学校は、児童生徒にとって未来に向けた準備段階の場であると同時に、現実の社会とのかかわりの中で、毎日の生活を築き上げていく場でもあります。

そのため、学校は、児童生徒一人ひとりの可能性を伸ばし、社会や職業で必要となる資質・能力を育むために、学校と社会の接続を意識した授業改善を進めていきましょう。



アクティブ・ラーニングの視点からの授業実践を共有する

県内外のアクティブ・ラーニングの視点からの授業実践の成果を、本校における教師の学び合いを基調とした授業研究に生かし、実践につなげましょう。さらに、その実践を、学校種間（小中、中高、高次）で共有し、児童生徒が学習方法や学習内容を積み重ねられるようにしましょう。

そのことが、児童生徒の生涯にわたって学び続けたり、主体的と考えようとする姿勢につながっていくことでしょう。

アクティブ・ラーニングの視点からの不断の授業改善を！

児童生徒の発達の段階を踏まえつつ、次の3つの視点から、教師自身が学習過程全体（習得・活用・探究）を見渡し、指導方法を不断に見直し、改善していきましょう。

① 深い学びの過程の実現

✓ 資質・能力の3つの柱*で示す力が総合的に活用・発揮される場面（関連付ける、説明するなど）を設計していますか。

「教える場面と、思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し、関連させながら指導することが求められています。」
*資質・能力の3つの柱：「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」



② 対話的な学びの過程の実現

✓ 多様な表現を通じて、教師と子ども、子ども同士が対話していますか。

「身に付けた知識・技能を定着させるとともに、それらが多面的で深い理解につながるように、対話的な学びによって、自らの考えを広げ深められるように指導することが求められています。」

③ 主体的な学びの過程の実現

✓ 実社会や実生活に関わる主題に関する学習を取り入れ、学びに向かう力を刺激していますか。

「学習に興味をもって積極的に取り組ませるとともに、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげることができるよう指導することが求められています。」

アクティブ・ラーニングノススメ in かがわ

アクティブ・ラーニングで 学びを深めよう！

- 1 「深い学び」の過程を実現！
- 2 学びを深める問題の発見・解決のプロセス！
- 3 学びを深める思考の可視化！



KEC 香川県教育センター
Kagawa Prefectural Education Center

1 「深い学び」の過程を実現！

「深い学び」とは、児童生徒が学習のプロセスの中で、「見方や考え方」*を働かせて思考・判断・表現し、「見方や考え方」を更に成長させながら、各教科の内容に関する深い理解とともに資質・能力を獲得していく学びです。

*「見方や考え方」：様々な事象等を捉える各教科等ならではの視点や、各教科等ならではの思考の枠組み

「深い学び」の過程を実現するアクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングの視点は、「知識が生きて動くものとして習得され、必要な力が身に付くことを目指す」*ものです。そのためには、「主体的な学び」と「対話的な学び」の過程を実現し、「深い学び」につなげる学びの過程を充実させることが大切です。

「深い学び」の過程では、新たに獲得した知識が、既存の知識と関連付けられたり、組み合わせられたりしていくことで、様々な場面で活用できるものとして身に付き

■ 「深い学び」の過程を実現する課題（例）

【課題】 対立するそれぞれの立場に立って、地球環境問題の解決策を考えよう。

主体的に社会・世界と関わる

個別の知識の構造化

【課題】 グループで地球環境問題の相互関係を図に整理しよう。

対話により考えを深め、広げる

【課題】 地球環境問題は、何が原因で生じているか、話し合ってみよう。

高等学校 公民科「現代社会」

「私たちの生きる社会～地球環境を考える～」より

*「教育の強靱化に向けて（文部科学大臣メッセージ）について」（平成28年5月10日）

その際、教師は習得・活用・探究という学習のプロセスの中で、児童生徒に「教える場面」と「思考・判断・表現させる場面」を効果的に設計し関連させながら指導することで、知識や技能を確実に定着させましょう。

「深い学び」の過程を通じた学習経験は、学び続ける力に！

アクティブ・ラーニングの視点に基づく授業改善を行うことで、児童生徒は、各教科等の内容的な理解を深めながら、育成すべき資質・能力を身に付けることができます。このような深い理解や資質・能力の獲得は、学ぶことの意義や社会との関係の実感につながり、学習に向かう内発的な動機を高めます。こうした学習経験の積み重ねが、生涯学び続ける力の獲得につながります。

2 各学校種間で学び方をつなげよう！

現在、多様な他者との学び合いを通して深い理解を促す学習が求められています。このような学び方は、各学校種で繰り返し実践されるとともに、児童生徒の発達段階*を踏まえ、校種間でつながり積み重ねられることによって、より豊かなものになります。

*文部科学省「言語活動の充実に関する指導要領」(小学校 平成23年10月、中学校 平成23年5月、高等学校 平成24年6月)

「相手の考えを真摯に聞き、応答する」学びを積み重ねる

どの校種においても、学び合いが児童生徒にとって価値あるものにするためには、聞く側が相手の思いや考えに対して、どのように聞き応答するのかがポイントです。そのために教師自身も児童生徒の言葉をよく聞き、「その理由は？」等と問い返し、自然な対話を促します。決して話型*に沿うことを目的とするのではなく、相手の話をよく聞き応答することで、学びが深まっていく面白さを実感できるようにしましょう。

*話型：子どもたちが話し合いをするために学校や学級で決めた文型(例：「私は～だと思います。わはは～だからです。」)

どの校種も大切にしたい「問い返し」のある学び合い!!

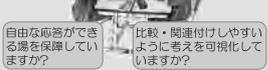
【双方向型の学び合い】

「深く考え、自ら解決したくなる課題」「集団で解決する必要がある課題」を設定していますか？

どうして? だって～だよ

分からない 分かる、例えば…

自由な応答ができる場を保障していますか? 比較・関連付けしやすいうように考えを可視化していますか?



相手の考えを引き出す「問い返し」

「どう思う?」と他者の考えを求める「問い返し」をしたくなるには、どの教科においても児童生徒が明確な目的意識をもつことが必要です。

また、児童生徒自身が「問い返し」によって学習が深まったことを振り返ったり、教師も思考を促す問いかけをしやすくなることで、その有用性を実感できるようにしましょう。

相手に寄り添う応答

話をうなすきながら聞いたり、互いの意見を認め合う発言をしたりする等、相手の考えに対して共感的に反応する態度を大切にすることで、安心して発言できる学級の風土をつくりまします。

自他の差異に気付く、問う

「どうして?」と理由や根拠を問いたくなるには、自他の考えが比べられるように、それぞれの考えを可視化することが有効です。ミニホワイトボードを活用することも効果的です。

こう思うんだけど、君はどう思う?

うーん、いや、ここはこうしたい方がいかな。例えば…

おー、なるほど、ありがとう! それじゃ、この場合はどうなる?

～をまとめるぞ! …だから、〇〇はどうかな?

じゃあ、ここは～になるのかな?

【高松市立南小学校】

【高松市立南小学校】

3 教師もアクティブ・ラーニングでつながろう!

次期学習指導要領で求められる教科横断的な学力の育成には、指導方法についての「校内全教師による情報交流」が不可欠です。また、資質・能力を系統的に育成するためには「異校種間の教師による情報交流」も大切です。

校内全教師間でできるアクティブ・ラーニング議論!

「グラフと表とを関係付けた説明は生徒にさせた方が…」教科により、アクティブ・ラーニングの方法や有効性等に特徴があります。しかし、担当教科や学年が違っていてもアクティブ・ラーニングの在り方についての議論や情報交流は成立します。そのような校内研究を行うことが、教育活動全体で児童生徒の資質・能力を育成し、評価するための指針や体制づくり、組織運営の改善など、いわゆる「カリキュラム・マネジメント」を可能にします。



アクティブ・ラーニングについて教師間で共通認識をもち、指導方法を共有しておくことにより、児童生徒が授業の展開に戸惑うことなく、課題解決に向かうことにつながります。

同地域の学校間で学びの連続性を!



A…子どもは教師の方を向いて話を聞いています。しかし、積極的に聞いているのか受け身なのか分かりません。

B…子どもは向かっています。しかし、話しているのか、課題について意見を伝えているのか分かりません。

児童生徒の学びの質を問うためには、外見の権相にとられず、主体性や協働性を捉えなければなりません。また、1時間の中で、AとBをどのように構成することが児童生徒の学びに効果的でしょうか。

このような学習者中心の学びの捉え方等について、校内はもちろん、同地域の「中高連携」、「小中連携」、「小小連携」等による授業公開などの合同研修会を行ってはいかがでしょうか。同地域の学校間で共通認識をもつことで、学びの連続性が確保できます。



アクティブ・ラーニングの参考資料を香川県教育センターWebサイトに掲載していますのでご参照ください。また、研究についてのご相談等がありましたら、香川県教育センター教育研究課までご連絡ください。

〒761-8031 香川県高松市東栗岡587-1
TEL 087-813-0931 (教育研究課 直通)
FAX 087-881-3270
http://www.kasawa-edu.jp/educ/htdocs/

平成28年2月

2 学びを深める問題の発見・解決のプロセス!

学びを深めるには、問題の発見・解決において、主体的・協働的な学びを促す教師の意図的な手立てが必要です。

児童生徒が問題を見いだすために

学習内容に迫る動機付けが、学びを深める問題の発見につながります。例えば、学習対象との出合わせ方を工夫することで、認識と現実のずれに気付いたり、体験活動を通して実社会や実生活における矛盾を感じたりできるようにすることが考えられます。

Leaf2-1「能動的な学習室に向かう課題づくり」参照

よりよい問題の解決を図るために

対話を通して多様な考えを吟味し、それらを統合して問題の解決を図ることが、深い学びにつながります。例えば、思考・判断・表現しながら問題の解決に向かうように、目的に応じた小集団の設定や、思考の可視化などの工夫により対話を重ねる場を充実させることで、見方や考え方が成長していきます。

相手や集団を変えて対話を重ねる
なぜ明治時代に近代化が進んだのだろうか?
(高等学校 地理歴史科 [日本史B])

ICTの活用を通して対話を重ねる
連続技に挑戦! ~初方支持補助のポイントを見つけよう~
(小学校 第5学年 体育科)

欧米文化の導入によって従来の価値観が変わった。それが一部の若者では?

アジアや欧米との関係をよくするために、政府が政策として近代化を求めたと思えるべきだよ。

隣のグループは、欧米やアジアや欧米などの大改革が原因だと話していたけれど、どう思う?

うまく回転できなかった、鉄棒から落ちてしまうのかもしれないよ。

腕が曲がっているから、腰が鉄棒から離れてしまうのかもしれないよ。

だから、背中も丸くなって回転スピードが速くなるんだな。

それじゃあ、腰が離れないように、腕の付け根で鉄棒を握るようにしたらどうだろうか。

なるほど、ロープを使って鉄棒から離れられないように練習してみよう。

【高松市立南小学校】

3 学びを深める思考の可視化!

学びを深める手立ての一つとして、見えにくい思考を見える形にすることが大切です。互いの考えを比較・関連付けし、それらが整理・統合される過程では、可視化によって思考が活性化され、学びの深まりが促されます。

可視化の目的とその良さを共有する

教師は、どのような目的のために思考を可視化するかを明確にし、児童生徒とともにその良さを共有することが必要です。

可視化する対象の例
○多様な考えの共有ができる
○考えを修正したり、関係付けたりできる
○学びの過程を振り返ることができる

学習の到達しやすさのための学習マップ
自分の立場を捉えるための名前磁石

互いの考えを出し合うための文章カード
考えの根拠を説明するためのICTの活用

調べたことや考えたことを説明するためのワークシート
予想を検証するための実験(クリップモーター)の操作

【高松市立南小学校】

アクティブ・ラーニングの参考資料を香川県教育センターWebサイトに掲載していますのでご参照ください。また、研究についてのご相談等がありましたら、香川県教育センター教育研究課までご連絡ください。

〒761-8031 香川県高松市東栗岡587-1
TEL 087-813-0931 (教育研究課 直通)
FAX 087-881-3270
http://www.kasawa-edu.jp/educ/htdocs/

平成28年6月

2 学びを深める問題の発見・解決のプロセス!

学びを深めるには、問題の発見・解決において、主体的・協働的な学びを促す教師の意図的な手立てが必要です。

児童生徒が問題を見いだすために

学習内容に迫る動機付けが、学びを深める問題の発見につながります。例えば、学習対象との出合わせ方を工夫することで、認識と現実のずれに気付いたり、体験活動を通して実社会や実生活における矛盾を感じたりできるようにすることが考えられます。

Leaf2-1「能動的な学習室に向かう課題づくり」参照

よりよい問題の解決を図るために

対話を通して多様な考えを吟味し、それらを統合して問題の解決を図ることが、深い学びにつながります。例えば、思考・判断・表現しながら問題の解決に向かうように、目的に応じた小集団の設定や、思考の可視化などの工夫により対話を重ねる場を充実させることで、見方や考え方が成長していきます。

相手や集団を変えて対話を重ねる
なぜ明治時代に近代化が進んだのだろうか?
(高等学校 地理歴史科 [日本史B])

ICTの活用を通して対話を重ねる
連続技に挑戦! ~初方支持補助のポイントを見つけよう~
(小学校 第5学年 体育科)

欧米文化の導入によって従来の価値観が変わった。それが一部の若者では?

アジアや欧米との関係をよくするために、政府が政策として近代化を求めたと思えるべきだよ。

隣のグループは、欧米やアジアや欧米などの大改革が原因だと話していたけれど、どう思う?

うまく回転できなかった、鉄棒から落ちてしまうのかもしれないよ。

腕が曲がっているから、腰が鉄棒から離れてしまうのかもしれないよ。

だから、背中も丸くなって回転スピードが速くなるんだな。

それじゃあ、腰が離れないように、腕の付け根で鉄棒を握るようにしたらどうだろうか。

なるほど、ロープを使って鉄棒から離れられないように練習してみよう。

【高松市立南小学校】

3 学びを深める思考の可視化!

学びを深める手立ての一つとして、見えにくい思考を見える形にすることが大切です。互いの考えを比較・関連付けし、それらが整理・統合される過程では、可視化によって思考が活性化され、学びの深まりが促されます。

可視化の目的とその良さを共有する

教師は、どのような目的のために思考を可視化するかを明確にし、児童生徒とともにその良さを共有することが必要です。

可視化する対象の例
○多様な考えの共有ができる
○考えを修正したり、関係付けたりできる
○学びの過程を振り返ることができる

学習の到達しやすさのための学習マップ
自分の立場を捉えるための名前磁石

互いの考えを出し合うための文章カード
考えの根拠を説明するためのICTの活用

調べたことや考えたことを説明するためのワークシート
予想を検証するための実験(クリップモーター)の操作

【高松市立南小学校】

アクティブ・ラーニングの参考資料を香川県教育センターWebサイトに掲載していますのでご参照ください。また、研究についてのご相談等がありましたら、香川県教育センター教育研究課までご連絡ください。

〒761-8031 香川県高松市東栗岡587-1
TEL 087-813-0931 (教育研究課 直通)
FAX 087-881-3270
http://www.kasawa-edu.jp/educ/htdocs/

平成28年6月

アクティブ・ラーニング ノ ススメ in かがわ

アクティブ・ラーニングで 全員参加の学校づくり！

- 1 私もできる！カリキュラム・マネジメント
- 2 授業改善からのカリキュラム・マネジメント
- 3 児童生徒が関わるカリキュラム・マネジメント



KEC 香川県教育センター
Kagawa Prefectural Education Center

1 私もできる！カリキュラム・マネジメント

資質・能力を育むには、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とともに、教育課程の在り方を改善し続けることが必要です。
そのためには、役割や経験年数が違う全教職員の視点や、児童生徒や保護者、地域の方々などそれぞれの立場からの視点を活用することが求められます。

カリキュラム・マネジメントって何？

カリキュラム・マネジメントは、各学校の教育目標の実現のため、児童生徒の姿や地域の実状等を踏まえ、学習指導要領等に基づき、教育課程を編成・実施・評価・改善することです。

カリキュラム・マネジメントの充実、全教職員が教育課程全体から日々の授業について見直し、改善に取り組み意識を高めます。そして、学校に関わる全ての人が連携・協働することにより、「社会に開かれた教育課程」の実現につながります。

どのようにカリキュラム・マネジメントをするの？

カリキュラム・マネジメントは、3つの側面から取り組むことが効果的です。

教科等横断的視点

各教科等の教育内容を相互の関係から捉え直し、より良い編成を行います。

- ・国語科で学んだ新聞づくりを社会科のスーパーマーケット見学のもとに生かそう！
- ・理科で環境問題に関わる教材がある。校内の先生方に、関連教材などを聞いて、学習時期を考えよう。

PDCAサイクルの確立

児童生徒や地域の現状等に関する調査やデータに基づき、教育課程の改善を常に繰り返します。

- ・目指す児童生徒像を実現するための学校課題は何だろうか？
- ・全教職員で、主体的・対話的に学ぶ授業づくりに取り組んだ成果と課題を共有しよう。
- ・児童生徒や保護者のアンケートから今までの取組を見直そう。

教育資源の活用

教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源の活用を効果的に組み合わせます。

- ・〇〇を専門にしている地域の方と一緒に活動したい。
- ・地域のあいさつ運動に参加しよう。
- ・児童生徒が自己評価できるように、ICTを効果的に活用できないかな？
- ・体験的な活動で学びが深まるように、地域の施設を活用しよう。



アクティブ・ラーニング ノ ススメ in かがわ

アクティブ・ラーニングで 学びを価値付けよう！

- 1 学習評価の充実を目指す！
- 2 学びの過程を評価する！
- 3 伸びを実感する振り返りを大切に！



KEC 香川県教育センター
Kagawa Prefectural Education Center

1 学習評価の充実を目指す！

児童生徒が自らの学びを振り返って、次の学びに向かうことができるように、学習評価も、アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善は、一貫性をもった形で改善をしていくことが求められています。

「どのように学ぶか」という視点からの学習・指導方法の改善

中教審答申※において、学びの成果として、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」を身に付けていくことが求められています。

そこで教師は、児童生徒が主体的・対話的に、深く学んでいく「学びの質」に着目して、授業改善の取組を活性化させていくことが大切です。
そのために教師は、単元・題材観、児童生徒観を踏まえて、児童生徒が「どのように学ぶか」という具体的な学びの姿を考え、指導方法を工夫していく必要があります。



※ 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）

学び意欲につながる学習評価 ～指導と評価の一体化～

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。

教師は、児童生徒にどのような力が身に付いたかといった学習成果を的確に捉えたうえで、指導の改善を図ります。その際、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるように工夫しましょう。
このように、「指導と評価の一体化」を図ったアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善が欠かせません。

教師の評価と支援

- ・白ころから、児童生徒が自らの思考の過程等をノートなどに残しておくようにしましょう。
- ・意思的な側面※を捉えて評価しましょう。提出物の評価のコメントは、児童生徒が自身の学びを実感することにつながります。



そこで、教師は総合的な評価とともに、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等によって、学習過程における形成的な評価を行うことが大切です。

※ 意思的な側面：児童生徒が自らの学習の目標をもち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を確立したり思考・判断・表現しようとして取り組んでいるかどうか

2 授業改善からのカリキュラム・マネジメント

アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントは、教育課程を軸にしながら、授業、学校の組織や経営などを行うためのものであり、両者は一体として捉えてこそ学校全体の機能を強化することができます。

アクティブ・ラーニングと運動させた学校づくり

各学校においては、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた指導方法の不断の見直し等による授業改善を進めていくことが求められています。

授業改善は、一単位時間だけでなく、単元や題材のまとまり、年間の指導計画から考える必要があります。さらに、教科等横断的な視点から行っていくことで、授業改善の取組は、カリキュラム・マネジメントを通じた組織運営の改善にもつながっていきます。



アクティブ・ラーニングの充実に向けた学校文化の醸成！

学校が育成を目指す資質・能力を明確にした教育課程は、アクティブ・ラーニングによる授業の実施状況や教科等間の連携の在り方を可視化し、全教職員で共有することが大切です。

こうした組織体制により、全教職員が教科等を越えて、アクティブ・ラーニングによる授業の在り方を自由に議論する文化が生まれます。

この学校文化は、教科間、各教科と特別活動や総合的な学習の時間との関連性を一層深め、教科単独では生みだし得ない教育効果をもたらします。

■カリキュラム・マネジメントとの運動で進む教職員の連携

- ・参観した授業で、生徒は深く考えていただけれど、教師のどんな手立てがあったのかな。授業者に聞いてみよう。
- ・技術・家庭科で扱った消費生活と社会科で扱う消費者行政の学習を効果的に関連付けられそうだ。

このような、各教職員の不断の授業改善と、学校全体がチームで取り組む校内研修等を通じた研究を重ねていくことで、自校のカリキュラムを自らマネジメントする意識の形成につながります。



アクティブ・ラーニングによる授業を校内で公開し、大学教員の指導・助言をもとに、教職員の授業デザイン力の向上を図った。
【香川県立丸亀高等学校】



大学教員の講義の後、授業実践について報告。他校の教員と交えて、深い学びにつながる授業についてグループ協議を行った。
【香川県立高松北高等学校】

3 児童生徒が関わるカリキュラム・マネジメント

学習の主体は児童生徒です。児童生徒が自らの学びをより良いものにしていくと目標をもち、学習環境等を改善しようとする取り組みが、各学校の教育目標の実現につながります。



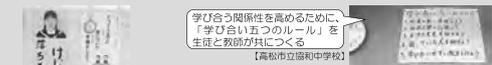
学習者主体の授業は、参画意識へつながる！

アクティブ・ラーニングによる授業では、児童生徒が自らの願いをもち、ゴール像を描きながら、それを実現しようとする能動的に取り組む姿が期待できます。このような学びの経験は、自分を取り巻く実社会や実生活での問題に気づき、解決しようとする意識をもたせるだけでなく、自分たちの力で解決できるという自信と自覚、学校や社会に参画する意識につながります。

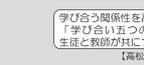
教師と児童生徒が共に学校をつくる！

多くの学校では、授業評価やアンケート調査を実施し、児童生徒の意見を生かした取組が行われています。また、児童生徒自身が「学びのルール」をつくったり、「自分たちが目指す児童生徒像」を学校全体に提案したりするなど、学校・学校文化を創造することもあつてはならないでしょうか。

このように、児童生徒が学級や学校づくりに対して積極的に関与する場を設定することは、カリキュラム・マネジメントといえるでしょう。教師は、共に学びをつくる存在として児童生徒の力を信じ、一人ひとりの言葉を受け止め、児童生徒の願いや考えが発揮できる学級や学校をつくっていきましょう。



学び合う関係性を高めるために、「学び合い五つのルール」を生徒と教師が共につくる
【高松市立昭和中学校】



授業で育まれた主体的な態度が日常生活にも広がり、生徒自ら発物の整理整頓を行う
【香川県立丸亀高等学校】



生徒と教師が協力して「授業」をより良くするために、生徒による授業評価を行う
【香川県立高松北高等学校】



児童会を通して、「目指す児童像」が提案され、学びに向かうより良い姿が共有化される
【香川県立丸亀高等学校】



授業で育まれた主体的な態度が日常生活にも広がり、生徒自ら発物の整理整頓を行う
【香川県立丸亀高等学校】



生徒と教師が協力して「授業」をより良くするために、生徒による授業評価を行う
【香川県立高松北高等学校】

アクティブ・ラーニングの参画資料を香川県教育センターWebサイトに掲載していますのでご覧ください。また、研究についての相談等がありましたら、香川県教育センター事務局までご連絡ください。

〒761-8031 香川県高松市東栗原567-1
TEL 087-813-0931 (教育研究課 直通)
FAX 087-881-3270
http://www.kagawa-edup.edu.jp/htdocs/

平成28年10月

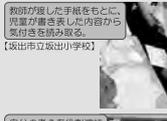
2 学びの過程を評価する！

求められる資質・能力を育むためには、ねらいの達成に向けて、児童生徒がどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかを評価していくことが大切です。そのため教師は、単元・題材で育みたい力を明確にするとともに、どの場面でのどのように評価するかについて想定しておくことが必要となります。

学びの過程を可視化し、多面的・多角的に評価する！

アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくりでは、「どのように学ぶか」が重要となるため、授業の最終場面に於ける総合的な評価だけでなく、単なる「できた」という評価にとどまらず、形成的な評価として、児童生徒の学びの過程を可視化し、その学びを多面的・多角的に捉えることで、「できた」の質的な評価をすることができるようになります。

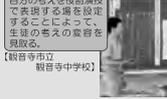
教師には、そのような児童生徒の学びの質を捉えることのできる目を培っていくことが求められています。



教師が採った手帳をもとに、児童が書き込んだ内容から気づきを積み取る。
【香川県立丸亀高等学校】



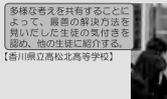
授業の終末で、学んだ内容を教師が板の端面に書き見せを提示することによって、児童がどのように内容を活用し解決するかを捉える。
【高松市立平礼小学校】



自分の考えを役割演技で表現する場を設定することによって、生徒の考えの発露を見取る。
【香川県立丸亀高等学校】



他のグループの考えを自由に見て回る時間を設けて、生徒が気づきや新たな気づきを共有し上げる。
【高松市立平礼小学校】



多様な考えを共有することによって、異なる解決方法を見いだした生徒の気づきを認め、協同性を醸成する。
【香川県立丸亀高等学校】



授業の始めに、ゴール像を共有することによって、そのポイントに基づいて行われる生徒の発表を刺激する。
【香川県立丸亀高等学校】

児童生徒の学びを質的に捉え、授業改善につなぐ！

学習評価は、一単位時間の学習内容に関する評価とともに、児童生徒自身が学びに向かう視点や教師自身の授業改善の視点にもつながります。そのため「何を、誰が、いつ、どのように」評価するかについて、本時や単元に具体的に位置付け、学びの質を高める活動として充実させていきましょう。

3 伸びを実感する振り返りを大切にする！

児童生徒が自分の伸びを最も実感するのは、振り返りの場面です。学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付けた資質・能力を自覚したりできるように児童生徒自身による評価活動を充実させていきましょう。

評価活動を学習活動の一つとして位置付ける！

アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくりでは、自己評価により自らの学習状況を客観的に捉え、伸びや改善点を自覚する場を設定することで、学びを深め、主体的に判断や行動をし、学びに向かう力が育まれます。そこで、教科等の特質に応じた評価活動を学習活動の一つとして位置付けることによって、学びの質の高まりにつながるといえます。

自己評価は、学習内容に関する視点と学びの過程に関する視点の2つの視点から振り返ります。その際、教師は、児童生徒が「何をどのように振り返るか」についての視点をもてるよう対話的に関わらしましょう。また、見通しの段階で課題に対する予想や仮説を立てておくことで、児童生徒は、学びの過程での気づきや自分の考えの変容を自覚することができます。

〈振り返るための視点の例〉

学習内容に関する視点	学びの過程に関する視点
○知識・技能の定着	○自己の学びに対する変容や成長
○既習事項や経験との関連性	○課題の解決に役立った事柄や方法
○実社会や実生活への活用	○新たな疑問や課題へのつながり

相互評価による有用感の高まりが、次の学びへ！

振り返りの場面では、相互評価できる場を設定することで、学ぶ内容、仲間と共に学ぶことの価値が明確になります。他者からの評価によって、自分では気づかなかった自分の考えや、解決過程のよさにも気づくでしょう。

このような相互評価を通して学びの有用感が高まることにより、自己に対する自信が芽生え、資質・能力の育成へとつながります。

また、振り返りの場面の充実、学んだことを他の場面で活用しようとするなど、新たな問いを生み出したりするなど、次の学びへの意欲となり、自ら問題解決に取り組もうとする態度を育てます。



仲間とのアドバースにより、自分の表現が良かったことを実感している。
【香川県立丸亀高等学校】



仲間からの評価をきっかけに、自分の考えを高めようとしている。
【高松市立十小中学校】

アクティブ・ラーニングの参画資料を香川県教育センターWebサイトに掲載していますのでご覧ください。また、研究についての相談等がありましたら、香川県教育センター事務局までご連絡ください。

〒761-8031 香川県高松市東栗原567-1
TEL 087-813-0931 (教育研究課 直通)
FAX 087-881-3270
http://www.kagawa-edup.edu.jp/htdocs/

平成29年2月

参考文献

- 文部科学省：初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問） 2014.11.20
- 文部科学省：教育課程企画特別部会における論点整理について（報告） 2015.8.26
- 文部科学省：次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告） 2016.8.26
- 文部科学省：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申） 2016.12.21
- 石井英真：今求められる学力と学びとは -コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影- 日本標準 2015.2
- 小林昭文：いまからはじめるアクティブラーニング導入&実践 BOOK 学陽書房 2016.2
- 国立教育政策研究所：資質・能力 [理論編] (国研ライブラリー) 東洋館出版社 2016.1
- 奈須正裕 他：教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり 図書文化社 2015.11
- 西岡加名恵 他：新しい教育評価入門 一人を育てる評価のために- (有斐閣コンパクト) 有斐閣 2015.4
- 松下佳代：ディープ・アクティブラーニング -大学授業を深化させるために- 勁草書房 2015.1
- 三宅なほみ 他：協調学習とは -対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業- 北大路書房 2016.3
- 溝上慎一：アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂 2014.9
- 高木展郎 他：「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは -アクティブな学びを通して- 東洋館出版社 2016.2
- 田中博之：アクティブ・ラーニング実践の手引き -各教科等で取り組む「主体的・協働的な学び」- 教育開発研究所 2016.4
- 田村知子 他：カリキュラムマネジメント・ハンドブック ぎょうせい 2016.6
- 田村 学：授業を磨く 東洋館出版社 2015.4
- 香川県教育センター：平成28年度全国学力・学習状況調査報告書 2016.10
- 香川県教育センター：平成25年度研究成果報告書「達人が伝授！ すぐに役立つ学級経営のコツ」2014.2
- 香川県教育センター：平成23年度研究成果報告書「思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価」2012.2
- 香川県教育センター：平成21年度研究成果報告書『『子どもの視点』を生かした授業改善』2010.3

香川県教育センター協力学校

平成27年度

高松市立協和中学校
高松市立牟礼小学校

観音寺市立観音寺中学校
坂出市立坂出小学校

平成28年度

香川県立高松北高等学校
高松市立協和中学校
高松市立十河小学校
綾川町立綾上小学校

香川県立丸亀高等学校
観音寺市立観音寺中学校
高松市立牟礼小学校

香川県教育センター

藤井 浩史 渡邊 智子 榎 貴志 上村 毅 山田 知子
山田 憲治 長町 裕子 山地 正樹 三好 一生 村川 和也
濱口 大

(平成27年度転出者)

倉沢 均 氏家 徹也 佐伯 卓哉 東条 直樹

平成29年2月発行
平成28年度 研究成果報告書

編集者 香川県教育センター

発行者 所長 藤井 浩史

〒761-8031 香川県高松市郷東町 587-1

TEL 087-813-0955 FAX 087-881-3270

表紙イラスト・挿絵 高松市立香東中学校 佐々木 啓祐

学び続ける教員のために
協働する教員のために
全ては子どもたちのために

